

# 社会科における地域学習の 授業づくりについての考察

— 道徳科，総合的な学習の時間，  
特別活動等の教科等横断的な視点も含めて —

池田 恭 浩

## 要 旨

本稿では，実際に小学校社会科の地域学習の授業づくり(構想)から，地域という教材の魅力を十分に引き出すための授業づくりについて考察した。さらに，十分に魅力を引き出された教材としての地域を用いて，カリキュラム・マネジメントにも記されている「教科等横断的な視点」からの授業づくりについての具体策を示した。

その結果，まずは意義を表面的に見ているだけでは授業づくりができないことを明らかにした。そこで，授業者が好奇心を持って地域のことを調べるために矛盾を感じたり，違和感を覚えたりしてから現実を認識して既知のこと(数少ない単純な理論)と比較することが重要であることも明らかになった。さらに，認識して比較をする時には自分自身が使い慣れた言葉を使う方が実感を伴うことを示した。次に，発問によって閃き(暗示)と論理の相互作用を生み出すこととそのための準備の必要性を示した。さらに，発問に対する子どもの閃き(暗示)を適切に扱えるようになるために，授業の方向性のある程度明確にしていること，教材に関係することを中心とした幅広い知識と経験則が必要であることが明らかとなった。そして，多くの時間を必要とする地域学習の準備のためにカリキュラム・マネジメントを活用して，十分な時間を確保することの必要性，さらにカリキュラム・マネジメントに記されている教具については，2万5千分1地形図と地理院地図 Vector を活用することの有効性を示した。

そして，道徳科や総合的な学習の時間，特別活動で地域学習の授業づ

くりや実践したことが有効に活用できることやその具体策について示した。その中で、実感を伴って理解することや矛盾を感じることで、自分自身の言葉を通じて考え、使い慣れた言葉を増やしていくこと、複雑さから学ぶこと、実際にやってみることなどが今回構想した地域学習との共通点であることが明らかになった。

## I. 問題の所在と研究の目的

現在も社会科で地域学習が行われている。小学校では第3学年で、

- (1) 身近な地域や市区町村の様子
- (2) 地域に見られる生産や販売の仕事
- (3) 地域の安全を守る働き
- (4) 市の様子の移り変わり

第4学年で、

- (1) 都道府県の様子
- (2) 人々の健康や生活環境を支える事業
- (3) 自然災害から人々を守る活動
- (4) 県内の伝統や文化、先人の働き
- (5) 県内の特色ある地域の様子<sup>(1)</sup>

の学習をする。中学校では、地理的分野で「地域調査の手法」<sup>(2)</sup>の学習をする。そして、この地域学習の意義について朝倉(1989)は、「(1)地域は社会事象を意味づける場である (2)地域は社会生活の原則を発見させる場である (3)地域は社会の発展を願う気持ちを養う場である (4)地域は社会科の学習能力を育成する場である」としている。また今谷(2007)も地域学習の教育的意義を唱えており、その意義を伊藤(1994)は以下のようにまとめている。「地域学習は①生活上の欲求や必要性に裏付けられ、子どもの意欲や関心を高める、②子ども自らの目や耳を使って学習しながら基礎的な学習方法が獲得できる、③地域における社会生活の構造が子どもに

社会をとらえる枠組みにとっての基盤的知識となる、④社会参画の態度を形成できる<sup>(5)</sup>。さらに宮崎(1994)は、「地域学習」が、「現代社会」の理解のための知的土台を築く場であり、人間と人間の結び付き方を学ぶ場である<sup>(6)</sup>」としている。

その一方で、地域学習における問題点も以下のように指摘されている。池(2012)は、「小学校では、身近な地域の学習の教材開発や地域調査の準備に多くの時間が費やされるが、各学校で地域調査に必要な地図等の資料やノウハウが共有されていれば、特に社会科を苦手とする教員にとっては大きな負担の軽減となる。ところが、多くの学校では各教員が授業で使用した資料等を共有する仕組みが確立しておらず、新たな学校に着任した教員の多くは、教材開発を資料収集の段階から始めなければならない<sup>(7)</sup>。」、小田・河本(2022)は、「地域に対する愛着や地域の誇る伝統や産業といった地域資源への関心が希薄となりがちな大都市域において、地域への愛着を実感するための教材を見つけるのは容易ではない<sup>(8)</sup>。」、友居(2022)は、「指導の困難性の内容について「地域教材を発掘すること」「児童の考えを深めさせること」「児童の見知らぬ地域の適切な教材を提示すること」「児童に問題意識(問い)を持たせること」の4項目であり、そのことは、30年前の篠原調査と変わっていない<sup>(9)</sup>」、今井(2017)は、「中学校では「身近な地域の調査」単元での現地調査の実施率が極めて低く、宮城県で実施された調査では、7割を超える教員が読図指導のみで単元を終えているとしている。小学校では、地域調査の実施率自体は高いものの、身近な地域の学習、特に地域調査の指導を苦手とする教員が多く、各市町村の作成する「副読本」に依存した授業が少なくない<sup>(10)</sup>」としている。

そして、これら地域学習の意義と問題点を整理すると以下ようになる。

#### 【意義】

- 地域は生活上の欲求や必要性に裏づけられた社会事象を意味づける場である。
- 地域は社会生活の原則を発見させるなど、「現代社会」の理解のための

知的土台を築く場である。

- 地域は人間と人間の結び付き方を学び、社会参画の態度を形成できる場である。
- 地域は子ども自らが目や耳を使って学習しながら社会科の学習能力を育成する場である。

#### 【問題点】

- 教材を見つけるのは容易ではない
  - ⇒「子どもに問題意識(問い)を持たせる」
  - ⇒「子どもの考えを深めさせる」
- 準備に多くの時間が費やされる
- 「副読本」に依存した授業が少なくない

つまり、意義を見てわかるように地域には教材としての魅力は充分にある。しかし、現状ではその魅力を授業者が十分に引き出すことができていないのである。この点については今谷(2007)も「小学校中学年の社会科における地域学習が、その重要性にもかかわらず、必ずしも子どもたちにとって魅力ある楽しい学習場面になっているとはいえないという実情もある。教師自身がその地域についての十分な知識・理解をもっていなかったり、教材として活用できる資料がなかなか手に入らなかったりして、いざ授業となるとどのような観点から内容を構成し、どのような手順と方法で学習を進めていけばよいのかといった点が、まだきわめてあいまいなままなのである。」<sup>(11)</sup>としている。

そこで本稿では、実際に小学校社会科の地域学習の授業づくり(構想)から、地域という教材の魅力を引き出すための授業づくりについて考察していく。さらに、十分に魅力を引き出された教材としての地域を用いて、道徳科や総合的な学習の時間、特別活動などの他教科・領域への活用(教科等横断的な視点)についても考察していく。さらに、考察だけではなく構想した地域学習の授業づくりの具体案も提示していく。

## Ⅱ. 地域学習の授業づくり(構想)

本章では、筆者の地域学習の授業づくり(構想)について記す。

### 1. 桃小での取組

今回構想した小学校3年生社会科の授業は、筆者が住んでいる地域の京都府向日市立第4向陽小学校(以下、4向小)での授業を想定したものである。そして、4向小にはかつて筆者の長女が通っており、まもなく次女も通う予定である。また筆者自身は京都府京都市下京区で生まれ育ち、結婚してから京都府向日市に住むようになり、この授業を構想したのは筆者が向日市に住んでから16年目のことである。つまり、筆者にとって向日市は第二の故郷という位置付けである。さらに、この授業は小学校学習指導要領(平成29年告示)解説社会編(以下、小学校解説)の第3学年の内容「(1)身近な地域や市区町村(以下第2章第2節において「市」という。)の様子について、学習の問題を追究・解決する活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。<sup>(12)</sup>」と「(4)市の様子の移り変わりについて、学習問題を追究・解決する活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。<sup>(13)</sup>」に基づいている。

また、この授業は筆者の前任校で京都市伏見区にある京都教育大学附属桃山小学校(以下、桃小)に勤務している時に実践した授業にも基づいている。桃小での実践の主な特徴は2万5千分1地形図と電子黒板を授業で活用したことである。

まず、2万5千分1地形図については、中学校学習指導要領(平成29年告示)解説社会編(以下、中学校解説)には、地理的分野の内容C日本の様々な地域(1)地域調査の手法アの「(イ)地形図や主題図の読図、目的や用途に適した地図の作成などの地理的技能を身に付けること。」と、地形図を活用することが明記されている。しかし小学校解説には、「自分たちの市の

位置を確かめたり、調べたことを白地図にまとめたりする際に必要となる方位や主な地図記号について、地図帳を参照して理解し活用できるようにすることを求めている。<sup>(15)</sup>」とされているだけである。こういった状況にも関わらず小学校で2万5千分1地形図の活用をしようと考えたきっかけが地図記号であった。筆者自身、長年小学校社会科の授業で地図記号を取り扱ってきたが、地図記号の存在意義が明確にはわからなかった。そんな時に出会ったのが2万5千分1地形図であった。もちろん、それまでにも目にしたことはあった。しかし、地図記号の存在意義という問題意識のもとで見たとときに気づいたのが、地形図という狭い空間に多くの情報を盛り込むためには地図記号が必要不可欠だということであった。このように授業者自身の好奇心から気づけたことは授業で有効に活用できる可能性が高まる。なぜなら、同じような思いを子どもにしてもらいたいという気持ちが高まり、授業づくりにより主体的に取り組むことができるからである。もちろん気持ちの高まりだけでは授業づくりはできないので、技術も必要になる。しかし、その技術を身に付け活用することの基盤となるのが気持ちの高まりなどの動機付けである。その後、さらに2万5千分1地形図について調べると、2万5千分1地形図は「地表面のようすを、測量によって正確に表現したもの」<sup>(16)</sup>であることや日本全国を網羅している「国の基本図」<sup>(17)</sup>であること、多くの地図のもとになっていること、2万5千分1地形図上の1mmが子どもには馴染み深い25m(短水路のプールの長さ)であることがわかった。さらに地形図は明治以降数年おきに改訂を繰り返しているので、現在と過去を比較できるということもわかった。そこで、社会科の授業の中で地域の2万5千分1地形図を小学3年生に提示してみると、子どもは2万5千分1地形図を食い入るように見つめ、様々な発見をしていった。のちに考察をした結果、地形図はそもそも記号の集まりなので感覚的に読み取ることができるため、小学3年生でもある程度の知識があれば読み取ることができるということがわかった。そして、この時2万5千分1地形図を提示する前に子どもに伝えた情報は、教科書に掲載されていた地図記

号と国土交通省国土地理院のホームページに掲載されていた地図記号一覧、そして等高線の基本的な読み方(間隔が狭い方が傾斜が急である)<sup>(18)</sup>のみである。

次に電子黒板に関しては、地形図上で発見したことを学級全体で共有するために使用した。つまり拡大とデジタルペンによる書き込みの機能を活用したのである。さらに二画面で提示することにより場所による違いや年代による違いを学級全体で共有することができた。さらに、電子黒板を使うことでデジタルとアナログの使い分けをする必要性も見えてきた。先述の通り、拡大をするときはデジタルが有効である。しかし、探すという作業をするときはアナログ(紙)が有効となる。なぜなら、デジタルの画面上の地形図をスクロールすると画面上に表示されない部分は完全に視界から消えてしまうからである。しかし、紙の地形図であれば紙の上に表示されている範囲であれば視界から完全に消えることはない。これは人間の視野が広いからである。さらに拡大と縮小も紙に目を近づけたり遠ざけたりすることで簡単にできる。また、京都市全体を2万5千分1地形図で提示するには12枚の地形図を繋ぎ合わせる必要があった。12枚の地形図を繋ぎ合わせるとかなりの大きさになる。その大きさは紙の地形図だからこそ感じられるものである。近年、教室での一人一台PCが実行されているが、やはり現在の汎用機では画面の大きさが充分とはいえない。もちろん、デジタルであれば日本全国、あるいは世界中の地図をすぐに表示することができる。しかし、人間の視野を最大限に活用したり感じたりすることを大切にすれば、アナログ(紙)を活用する方がよい場面もある。ただし、今後のテクノロジーの発達により画面のより大きなPCが汎用機となるのであればデジタルとアナログの活用の仕方は変わってくるかもしれない。

## 2. 構想のきっかけ(動機付け)と授業計画

今回、この授業を構想しようとしたきっかけが2022(令和4)年4月23日(土)に次女と地域の公園に遊びに行ったことである。遊びに行った公園の名前は「稲荷公園」で、次女が保育園からよく遊びに連れて行ってもらっ

ていた公園であった。そして、稲荷公園には次のことが記された看板があった。「稲荷公園の北側一体(約2千m<sup>2</sup>)は、昭和28年頃まで神饌田として神に供える米がつくられていました。その後、住宅開発が進み、市民の憩いの場となるよう、昭和44年から伏見稲荷大社より無償にて社有地を借用し、稲荷公園として整備したものです。向日市」。この内容は、伯父の店が伏見稲荷大社の境内にあり、幼い頃から伏見稲荷大社に親しみがあつた筆者にとってはとても違和感のある内容であつた。なぜなら、伏見稲荷大社のある京都市伏見区と稲荷公園のある向日市寺戸町は地理的にも離れており、その繋がりを聞いたことがなかつたからである。つまり、なぜ伏見稲荷大社の神田が向日市寺戸町にあつたのかという疑問が湧いたのである。そこで、この違和感を解消するために公園に遊びに行った日の夜に Web ページを検索することで、次のことが明らかとなつた。まず、「神饌田」とは「神田、宮田、御供田ともいう。神に属し祭祀に供せられる稲を作る<sup>(19)</sup>田。」であることがわかつた。次に、「向日神社末社勝山稲荷神社」や「元稲荷古墳」があることはわかつたが、神饌田とのつながりはわからなかつた。そして、向日市 HP の「向日市の歴史」に掲載した歴史年表<sup>(20)</sup>から、1930(昭和5)年の「御大典記念事業として伏見稲荷神社が大字寺戸小字二枚田で御田植祭を行う」という記述を見つけた。さらに、伏見稲荷大社の神田は現在稲荷山の麓にあり、今もそこで毎年「水口播種祭」「田植祭」「抜穂祭」が行われていることもわかつた。また、伏見稲荷大社神田前にある案内板に「昭和五年昭和天皇御即位大禮記念行事の一つとして向日市寺戸町二枚田に五反歩程度の新田が設置されました。しかし、諸般の事情により、昭和二十三年緑豊かなこの稲荷山の麓に移設されました。」<sup>(21)</sup>と記されていることもわかつた。

そして、稲荷公園に遊びに行った日の翌日には手掛かりを求めて向日市文化資料館を訪れた。そこで、受付の方に稲荷公園と伏見稲荷大社とのつながりについて尋ねたが、これといった手掛かりは掴めなかつた。しかし、受付で販売されていた書籍の見本の中に『向日市史史料編付図』があり、



その中の「昭和11年の向日町」という昭和11年の都市計画図(京都市土木局)の現在の稲荷公園のあたりに「官幣大社稲荷神社神田」という表記があった。また、同じ付図の中に大正11年と昭和35年のものがあったが、どちらにも「官幣大社稲荷神社神田」という表記はなかった。そして、更なる手掛かりを探すために『向日市史下巻』と『向日市史史料編』を購入した。のちに、『向日市史史料編付図』の中の「江戸時代の寺戸村古絵地図」に手掛かりがあるのではないかと考え、江戸時代を研究している大学教員に尋ねてみたが、これといった手掛かりは掴めなかった。

5月3日(火)の憲法記念日には、手掛かりを求めて伏見稲荷大社の神田へ行った。神田では新たな手掛かりは見つからなかったが、伯父から伏見稲荷大社との繋がりが深い秦氏が関係しているのではないかとの話を聞いた。しかし、後日秦氏について調べたが、これといった繋がりを見つけることはできなかった。それでも、秦氏が長岡京の造営に深く関わっていたことなど、秦氏を通じて向日市と伏見稲荷大社がつながっていることがわかった。さらに、Web ページを検索していると、現在伏見稲荷大社の神田で行われている水口播種祭に大阪府摂津市の三島初穂講の方が参加していることがわかった。そして、そのこととのつながりも調べたが手掛かりは掴めなかった。

その後、年表に記載されていた「昭和五年昭和天皇御即位大禮記念行事」について『昭和天皇実録第五』や『昭和二万日の全記録第1巻』などで調べたが、これといった手掛かりはつかめなかった。しかし、これまで詳しく知らなかった「昭和天皇御即位大禮」について知ることができた。そして、向日市立図書館で見つけた『図録20世紀のむこうまち』の中に昭和5年のお田植祭のことが取り上げられた新聞記事(「昭和新聞」第104号昭和5年(1930)6月25日)<sup>(23)</sup>を見つけた。しかし、その記事の中にもなぜ伏見稲荷大社の神田が向日市寺戸町にあったのかということは記されていない。

7月28日(木)には勤務校の近くにある右京図書館へ手掛かりを求めて行

った。そこでは、『京都地名語源辞典』から現在稲荷公園がある、そしてかつて「官幣大社稲荷神社神田」があった「二枚田」という地名の語源<sup>(24)</sup>がわかった。しかし、この語源にも手掛かりはなかった。そして、ついに『伏見稲荷大社御鎮座千三百年史』の中に以下のような手掛かりを見つけた。「昭和五年(1930)には、昭和大礼記念事業のひとつとして神田が設けられることになった。まず四月四日に神田買入れ所要経費支払いの許可を受け、五月一日に神田設置奉告祭、同月三日に当社最初の「水口祭并播種祭」が執行された。六月四日には寺戸区(現向日市寺戸町)から設置費が寄付されるについて奉告祭を執行。同月五日には新京阪鉄道株式会社(現阪急電鉄株式会社)からも神田設置費<sup>(25)</sup>の寄付があった。」つまり、寺戸区と新京阪鉄道株式会社から伏見稲荷大社神田設置費の寄付がされたのが理由のひとつだったのである。確かに「官幣大社稲荷神社神田」の西側に新京阪鉄道株式会社の線路があった。しかし、なぜ寺戸区と新京阪鉄道株式会社から神田設置費の寄付があったかはまだわかっていない。さらに、「当神田での祭儀は、昭和二十年の敗戦におよんで不在地主の一端とされ、寺戸の神田は手放さざるをえなかったが、幸いにも元神田として有償にて手放すことが叶い、その経費で、かねて上地された境内回復の一端に寄与した。昭和二十三年に当社境内の新池から流路が八嶋池に注ぐあたりの神苑を、いささか拓き、大阪三島初穂講の協賛を得て、寺戸の神田の五分の一程度の広さながら、古儀のままに斎行して今日におよぶ。」<sup>(26)</sup>と、神田の場所が変わった経緯についても記されていた。しかし、なぜ大阪三島初穂講に協賛を得ることができたのかといったことまではわからなかった。

このようなことを調べているうちに、何とかして調べたことを小学校社会科の地域学習で活用することができないかと考えていた。しかし、稲荷公園は4向小ではなく向日市立第3向陽小学校の校区であり、今回調べたことは向日市の中でもかなり狭い範囲のことであった。そのため、地域学習として活用するには向日市に関してさらに広い範囲と視野で調べる必要があることに気づいた。さらに、稲荷公園と伏見稲荷大社の神田について

## 社会科における地域学習の授業づくりについての考察

調べていくうちに、これまであまり興味を持つことがなかった向日市のことに興味を持つようになっていくことにも気がついた。そこで、先述の前任校での実践をもとに筆者にとって最も親しみがある向日市の4向小で実践することを想定した授業を構想することにした。そして、今回構想した授業の単元計画は以下の通りである。

わたしたちのまち・みんなのまち(全18時間)

- ・社会科で何を学ぶのか?学校のまわりのまちの様子(1/18)
- ・学校のまわりのまちの様子とそれを調べる方法を考える(2/18)
- ・タブレット PC で調べてみよう(3/18)
- ・屋上から調べてみよう(4・5/18)
- ・まちたんけんの計画を立てよう(6/18)
- ・まちたんけんに行こう(7・8/18)
- ・まちたんけんを振り返ろう(9・10/18)
- ・地図について考える(11・12/18)
- ・地形図で学校のまわりのまちの様子を調べる(13・14/18)
- ・地形図で高い土地の様子を調べる(15/18)
- ・地形図で交通や公共施設について調べる(16・17/18)
- ・向日市の様子をまとめよう(18/18)

市や町のうつりかわり(全17時間)

- ・約130年前の学校のまわりのまちの様子を調べよう(1・2/17)
- ・約90年前の学校のまわりのまちの様子を調べよう(3・4/17)
- ・約60年前の学校のまわりのまちの様子を調べよう(5・6/17)
- ・約30年前の学校のまわりのまちの様子を調べよう(7・8/17)
- ・約110年前の公共施設や交通の様子を調べよう(9・10/17)
- ・約60年前の公共施設や交通の様子を調べよう(11・12/17)
- ・向日市のうつりかわりを年表にまとめよう(13・14/17)

- 人々の生活の様子のおつりかわりを考えよう (15~17/17)

### 3. 第3学年の地域学習

この後は授業づくり(構想)の詳細について、そしてその過程でどのようなことを調べ考えたのかを単元計画に基づいて述べていく。

#### (1) わたしたちのまち・みんなのまち

- 社会科で何を学ぶのか?学校のまわりのまちの様子(1/18)

第1時は、社会科の学習の第一歩となる貴重な時間である。そこで、この時間には授業者が社会科で何を学ぶのかなどを子どもに提示したい。筆者の場合は、「社会科は、どんなことを学習する教科ですか?」と子どもに問い掛けたあとに、「社会科の「社会」ってどういうみですか?」と問い掛ける。もちろん、子どもにはその答えはわからない。ひょっとすると私たち大人もわからないのかもしれない。「社会」の辞書的な意味や専門家による様々な定義はあるが、社会科とは「社会」の意味を問う教科でもあると考えている。そのため、社会科の授業者にとって「社会」の意味を問い続けることはとても重要なことである。そして、「社会」の意味を問うときに留意しなくてはならないのが、社会という言葉が明治以降に日本語になったということである。明治なってから society という言葉が日本に入ってきて、その訳語として社会という言葉が誕生し、現在に至るのである。さらに個人という言葉も同様である。こちらは individual の訳語として誕生し、日本語となったのである。つまり、明治以前の日本では社会や個人という概念自体がなかったと考えられるのである。もちろん、社会や個人に似たような概念はあったのかもしれないが、現在私たちが使っている society の訳語としての社会や individual の訳語としての個人という言葉はなかったのである。だからこそ、社会科という教科の学習を通じて社会という言葉の意味を問い続け、「社会」という言葉や概念を育てていくという覚悟も必要となる。その社会の意味を現時点で筆者は子どもに

次のように伝えている。「おたがいにたすけ合って生活をしている人のあつまり」そして、ここでの「人」は誰のことなのかを子どもに問い掛け、それが自分たちのことであることに気づけるようにする。それから、「あなたは、おたがいにたすけ合って生活していますか？」と問い掛け、その後で社会科で何を学ぶのかを以下のように伝える。「社会で、人々がどのようにしておたがいにたすけ合って生活しているのか、そのひみつにせまる！」さらに、キーワードとして「人々」「生活」「ひみつ」を取り上げ、それぞれの意味を「しゅやく」「生きて活動すること(しぜんをりようしている)」「かくれている(見えない)」と伝える。つまり、この中には授業者が社会科の学習の中で大切にしたいと考えていることが記されているのである。もちろん、小学3年生にはこの言葉の意味はこの時点ではわからない。しかし、この言葉が授業者にとっても子どもにとってもこれからの社会科の授業における指針となるのである。だからそこ、この指針を授業者自身が考え、子どもに提示することが重要なのである。なぜなら、借物ではなく自分で考えた言葉であれば、その言葉に実感を伴い、責任を持つことができるからである。しかし、最初からうまく指針を考えることはできないので、借物である言葉も使いながら実践を積み重ね、徐々に自分で考えた言葉にしていくことが重要である。

そして、このように社会科で何を学ぶのかを伝えた後に最初の単元である「わたしたちのまち・みんなのまち」の導入を行う。導入での最初の問い掛けは、「第4向陽小学校のまわりのまちは、どんなまちだと思いますか？」である。この一見特徴のない問い掛けにも様々な意味がある。まず、「第4向陽小学校のまわりのまち」というのは社会科の導入で問い掛けた社会の空間的な範囲の一例となる。さらに、子どもは学校の周りのまちに住んでいるので全く知らないということはない。ただし、気をつけなければならないのが国立や私立の学校の場合は学校の周りのまちに住んでいない子どもがいる可能性があることである。次に、「どんな」という抽象的な問い掛けである。抽象的な問い掛けは一問一答ではなく一問多答となる。

そのため、子どもの意見の範囲を広げることができる。しかし、その一方で抽象的な問い掛けに子どもが慣れていないと、意見の範囲が広がるために何を答えていいのかわからなくなる場合がある。そこで、抽象的な問い掛けを社会科だけではなく、様々な教科の学習の中に取り入れることで子どもが意見の範囲の広さを感覚で捉えることができるようになるのである。ただし、より広い範囲の子どもの意見を引き出すためには、授業者により幅広い考え方や知識がなければならない。そして、問い掛け全体として子どもがよく知っている学校周辺のまちのことを聞いているのではあるが、子どもは普段の生活の中でよく知っているまちを「どんなまちなのか」というふうに考えたことはないことが予想される。そのため、子どもはよく知っているとの自覚があるにも関わらず、「どんなまちなのか」という問い掛けに簡単に答えられないという違和感を覚えるのである。これこそが子どもが考えたいと思うための第一歩となる。つまり、違和感をなくすために何とかしたいと思うのである。そうすることで閃き(暗示)も生起しやすくなるのである。そして、これが地域学習をすることの大きな意義なのである。学校の周りのまち、つまり子どもにとって親しみがかりよく知っていると感じている身近な地域について、その身近な地域のわからないことに直面すると子どもは違和感を覚え、それを解消しようとする。その時に考えたいと思い、閃き(暗示)も生起しやすくなるのである。さらに、これが社会科で何を学ぶのかを伝えた時の「そのひみつにせまる！」の意義である。つまり、「ひみつ=かくれている(見えない)」からその教材を授業で取り上げる価値があり、見えないものを見たいと思うことで意欲や関心が高まるのである。さらに、見えていたと思っていたのに実は見えていないものがあつたとわかった時に違和感を覚えれば、閃き(暗示)が生起しやすくなり、閃き(暗示)が生起すればその閃き(暗示)を論理によって検証をするといった形で学習を進めることができるのである。

- 学校のまわりのまちの様子とそれを調べる方法を考える(2/18)

第2時では、小学校の周りのまちなみや様子を調べる方法を考えたい。しかし、この調べる方法を考えるという過程は飛ばされることがよくある。なぜなら、授業者が準備した方法で調べさせたいと思うからである。もちろん、単元計画を立てる段階で調べる方法も準備する必要があるため、その気持ちも理解できる。しかし、ここで重要なのは調べる方法を考えるということである。第1時で学校のまわりのまちはどんなまちなのか知りたい、あるいは調べたいという気持ちが高まっていれば、調べる方法についても子どもから積極的に意見が出ると考えられる。そして何より大切なのは、なぜその方法で調べればよいと思ったのかということについて学級全体で考えていくことである。つまり、閃き(暗示)から導き出された調べる方法の妥当性を論理を使って検証していくのである。そうすることで、どの方法を適応することが妥当なのかがわかるだけでなく、それぞれの調べ方の長所や短所もわかる。そのため、実際に調べるときに気をつけなければならないこともわかる。しかし、実際にやってみるという体験に勝るものはないので、可能な限り子どもが提案した方法で調べることを実践できるようにしたい。例えその方法でうまくはいかなくても、その失敗が子どもの学びになると考えられる。そのためにも事前に調べる方法について子どもが提案し、提案した方法について論理的に考えることは重要なのである。

- タブレット PC で調べてみよう (3/18)
- 屋上から調べてみよう (4・5/18)  
⇒ 方位(四方位・八方位)を取り上げる

第3～5時については、桃小での実践をもとにしている。そして、この時間の調べる方法については先述の通り子どもの意見に基づいて最終的に決めることが望ましい。それでも、GIGA スクール構想による一人一台 PC という環境を考えれば、PC を使って調べたいという声は上がると考えられる。そのため、PC を使って調べるという想定も必要となる。その

場合、重要となるのがデジタルで調べることと屋上から調べる、まちたんけんに行くというアナログで調べることとの対比や有効な組み合わせを考えることである。そのためには、授業者もデジタルとアナログの両方で調べるという体験をしておく必要がある。さらに、いずれの方法で調べても調べたことを振り返る時間は必ず確保しなくてはならない。なぜなら振り返ることによって調べたことが再構成され、子どもにとっての学びとなり、さらに、新たな課題を見つけることにもつながるからである。

- まちたんけんの計画を立てよう(6/18)

⇒まちたんけんに行く目的も決める(学習課題)

第6時では、まちたんけんに行く目的を決めたい。そして、目的を明確にした上で具体的にどんなことをまちたんけんで調べるのかを明確にする。この単元計画に基づくのなら、この時点で子どもはPCを使ったり屋上から見たりすることで小学校のまわりのまちについて調べている。つまり、ある程度の情報を持っているのである。しかし、その情報では不十分であるためにまちたんけんに行くのである。こういった状況をつくり出すためにも先述の振り返りの時間が重要となる。つまり、振り返ることで子どもがこれまでに集めた情報では不十分であるということに気づけるようにするのである。さらに、この時間にどのあたりにたんけんに行けばいいのかや何を持っていけばいいのかということも話し合うことができれば、より主体的にまちたんけんに取り組むことができると考えられる。もちろん、事前の予定から大幅に変わることは避けたいので、そのあたりの配慮は必要となる。

- まちたんけんに行こう(7・8/18)

第7・8時にはまちたんけんに行く。この時には子どもがたんけんをする場所の白地図を持って行き、発見したものをどんどん書き込めるようにしたい。以前ならこの白地図を作成するのに手間が掛かっていたのである



## 社会科における地域学習の授業づくりについての考察

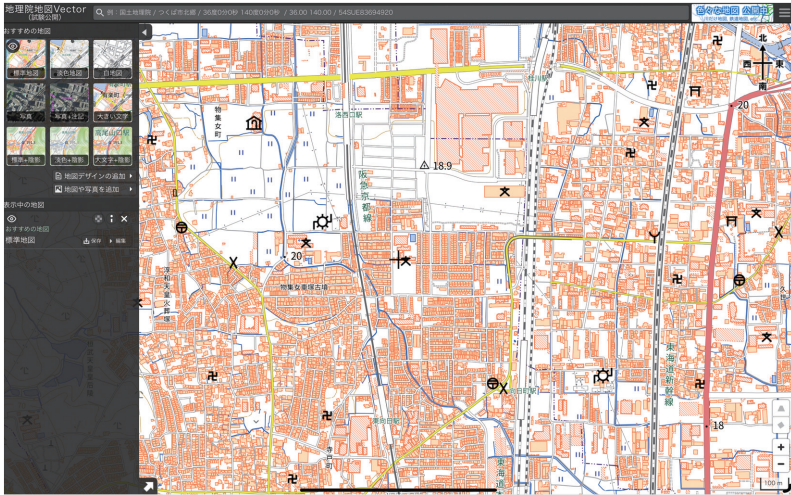


図1 「地理院地図Vector」より

が、現在は国土交通省国土地理院から試験公開されている「地理院地図Vector」<sup>(27)</sup>を使えば白地図を簡単に作成することができる(図1)。このWebページを活用すれば日本全国の様々な場所の地図を簡単にカスタマイズすることができるので、今後本格的な公開になることが期待される。ここまでの準備ができていれば充実したまちたんけんになるが、忘れてはならないのが子どもの安全の確保である。理想的なのは子どもを少人数のグループにわけ、それぞれのグループに大人が付くといった体制である。小規模校であれば実現可能性は高いが、大規模校では簡単にはいかない。桃小は教育大学の附属校であったため、教育大学の学生が支援員として参加してくれた。このあたりはそれぞれの学校の実情によって考えなければならないところである。

- ・まちたんけんを振り返ろう(9・10/18)

⇒白地図にまとめることも含む

第8・9時はまちたんけんの振り返りをする。先述の通り振り返りの時



図 2

(筆者作成)

間はとても重要な時間である。この振り返りで大切になるのが、まちたんけんで調べたことを改めて白地図にまとめることである。もちろん調べたことを再構成することは重要であるが、それを白地図を使って行うことによって、地図というものを本格的に子どもが意識する時間にするのである。そこで、図2のように子どもが書き込んだ白地図をまとめたり、「地図にまとめてよかったことは？」と子どもに問い掛けるという方法もある。

- 地図について考える(11・12/18)

⇒地図記号と地形図を取り上げる

第11・12時は地図記号と地形図を取り上げる。先述の通り、地形図を取り上げることは筆者独自の方法である。それでも京都市の地域学習の副読本である『令和4年度版わたしたちの京都3年』には、「市の様子とくら

しのうつりかわり」で昔と今を比較するために地形図が取り上げられている<sup>(28)</sup>。そして、この時間に学習することは先述の桃小での実践の特徴で述べたことである。

- 地形図で学校のまわりのまちの様子を調べる(13・14/18)

第13・14時は、第11・12時に学習したことを活かして地形図を使って学校のまわりのまちの様子を調べる。まず第13時では、まちたんけん子どもが調べた範囲とほぼ同じ範囲の地形図を読み取る(図3-1)、(図3-2)。そうすることで、子どもが実際に歩いて自分の目で見た風景を思い浮かべながら地形図を読み取ることができる。そして、読み取る地形図上に適度に地図記号があることも望ましい。そうすることで第11・12時に学習したことを活用することができるからである。さらに、可能であればこの時の地形図は紙で用意したい。なぜなら、デジタルの地形図では拡大・縮小をすることで縮尺が変わってしまうからである。縮尺が変わると長さ(2万5千分1地形図上の1mmが実際の25m)を定規を使って測ることが難しくなるからである。もちろん、デジタルの画面上で長さを測る機能もあるが算数で



図 3-1

(「地理院地図 Vector」より筆者作成)



図 3-2

(「地理院地図 Vector」より筆者作成)

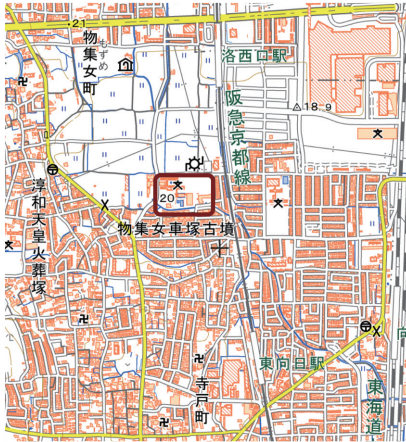


図4  
 (「地理院地図 Vector」より筆者作成)

学んだ定規で長さを測ることがこういったところでも活用できることに気づくことやアナログでの操作にも慣れておくことを考えると、できれば紙の地形図を使用したい。しかし、地形図で示す範囲が狭すぎてそのままの縮尺で紙に印刷をすることが難しい場合は、おおよそで構わないので何倍にしたのかを子どもに示したい。続く第14時では、さらに広い範囲の地形図を読み取る(図4)。今回は、JR 京都線の向日町駅と阪急京都線の東

向日町駅、さらに主要な道路が入ることを意識した。もちろん、地域によってどの範囲を選択するのは変わってくるが、この後学習する場所との関連は考えなくてはならない。解説には、「都道府県内における市の位置」「市の地形」「土地利用」「交通の広がり」「市役所など主な公共施設の場所と働き」「古くから残る建造物の分布」などを取り扱うこととされているので、指導計画を考える段階で地域のどの場所を取り上げるのかを考える必要がある。さらに解説には、「身近な地域や市の様子を捉え、場所による違いを考え、表現すること。」とされているので、最終的にこのような資質・能力を子どもが身に付けられるようにする必要がある。そのために、地域のどの場所を取り上げるのかを考えなくてはならない。桃小での実践では、「高い土地の様子を調べる」として京都市左京区花背の山間部を取り上げ、「交通や公共施設について調べる」として京都市中京区と下京区の市街地を取り上げた。先述の通り、京都市全体を提示するには地形図12枚が必要なので、取り上げる場所を考える時の選択肢は多かった。しかし、4向小のある向日市は面積が7.72km<sup>2</sup>で西日本で一番狭く、全国

でも三番目に狭い市である。そのため、今回は京都市との違いに戸惑いながらも何とか取り上げる場所を選択することができた。ただ、公立学校の場合は必ず異動があるので、様々な市区町村で地域学習の教材をつくる経験は必要不可欠だといえる。また、どの場所を取り上げるかはこの後の「市や町のうつりかわり」の單元にも関わってくるので、複数の單元を見通した上で判断をする必要がある。

・地形図で高い土地の様子を調べる(15/18)

第15時は、地形図で高い土地の様子を調べる。先述の通り、地域によっては「低い土地の様子」や「川の流れている土地の様子」、「海に面した土地の様子」など、様々な取り上げ方が考えられる。そして、可能であれば取り上げる場所へ実際に子どもと一緒に行ければよいが、行けないことを想定するなら地形図がとても役立つ。

なぜなら、地形図は土地の高低を等高線で表しているからである。そして、等高線の簡単な読み取りなら小学生にもできる上に、イメージとして高低差を表現しているからである。今回は4向小の西側(竹林)を取り上げた(図5)。そして、「地理院地図Vector」のツールにある断面図を使えば、高低差をグラフで表示できるので、こういった機能も有効活用したい(図6)。さらに今回は向日市の外側にはなるが、この時間に提示した場所のさらに西側のより高い土地も取り上げる。なぜなら、4向小の北から西側を見ると図7のように

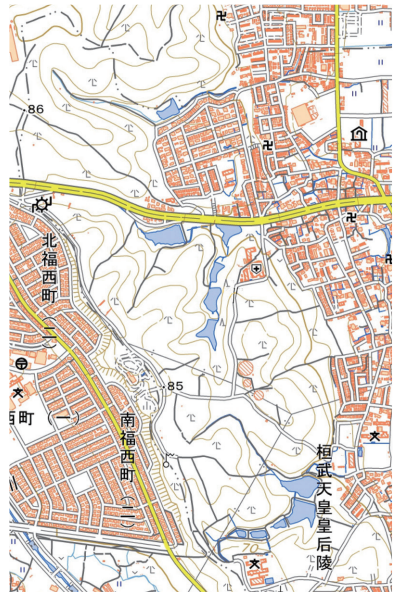


図5

(「地理院地図Vector」より筆者作成)

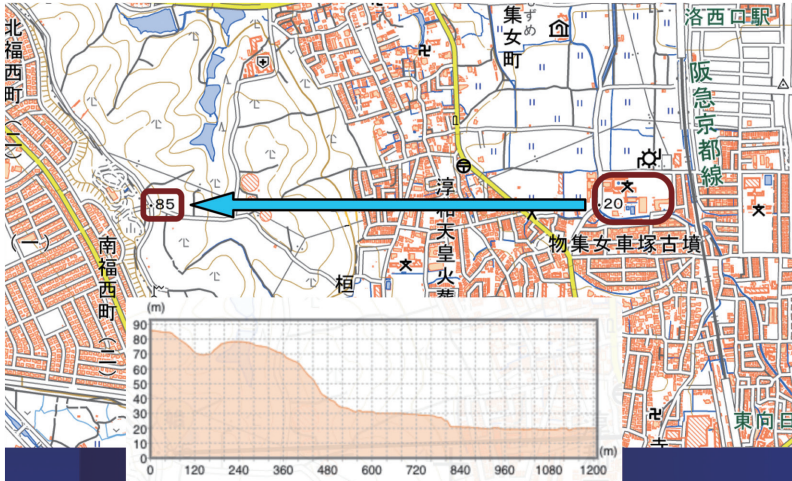


図6 「地理院地図 Vector」より筆者作成



図7 (筆者撮影)

見えるからである。この風景を地形図と断面図であらわすと図8のようになる。このように地形図や地理院地図を活用することで、高い土地の様子を調べることができる。

- 地形図で交通や公共施設について調べる(16・17/18)

第16・17時は、地形図で交通や公共施設について調べる。今回は向日市の向日や鶏冠井付近を取り上げる(図9)。交通については、阪急京都線(西向日駅)、JR京東線(向日町駅)、東海道新幹線、国道171号線、名神高速道路などが向日市を通っていることがわかるようにした。公共施設については、市役所、図書館、警察署、消防署、体育館、簡易裁判所、郵便局、病院、競輪場がわかるようにした。さらに、古くから残る建造物としては、向日神社、南真経寺、長岡宮跡が

社会科における地域学習の授業づくりについての考察

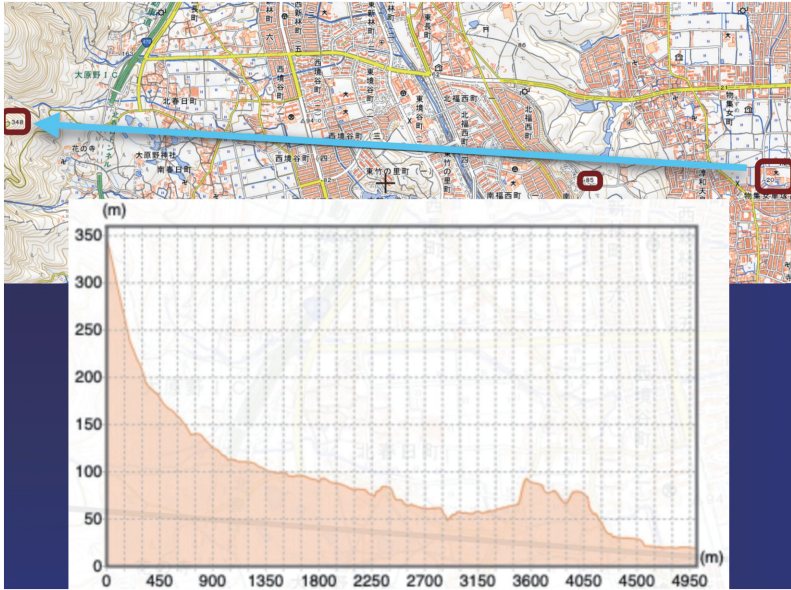


図 8 (「地理院地図 Vector」より筆者作成)



図 9 (「地理院地図 Vector」より筆者作成)

わかるようにした。

- 向日市の様子をまとめよう(18/18)

第18時は向日市全体の様子をまとめる。まずは、これまでに取り上げた学校付近の地形図(図4)、学校西側(竹林)の地形図(図5)、向日・鶏冠井付近の地形図(図9)を提示して、「向日市はどんなまちだと思いますか?」と問い掛ける。そして、この問い掛けへの答えを考える時間は充分に取ってもいいと考えられる。なぜなら、この問いかけに答えるためにはこれまでに学んだことを振り返る必要があるからである。さらに、子どもから出た答えを交流することで学級全体でこれまでに学習したことを振り返ることができる。そして、学級全体の意見交流が終わったところで向日市の全体像を提示する(図10)。この時に、京都市全体を提示した地形図12枚と向日市の大きさを比較すれば、向日市がいかに狭い市であるかが実感を伴って捉えられると考えられる。さらに向日市が西日本で一番、全国でも三番目に面積が狭い市であることを伝えることも効果的であると考えられる。この単元はこれで終わりになるが、この小さな向日市も地理的・歴史的には要衝の地であることを「市や町のうつりかわり」の単元で取り上げることを授業者はわかっておく必要がある。つまり、この単元は「市や町のうつりかわり」の単元の伏線でもあるということである。さらに、この後に学習する「はたらく人とわたしたちの暮らし」(農家や工場、お店の仕事)「暮らしを守る」(消防、警察)「わたしたちの京都府」「住みよいくらしをつくる」(上下水道やゴミ処理)などにもつながっていることを意識しておく必要がある。

## (2) 市や町のうつりかわり

- 約130年前の学校のまわりのまちの様子を調べよう(1・2/17)

この単元では、基本的に地形図を使って昔と今を比較していく。第1・2時では、約130年前の学校のまわりのまち様子について考えていく。



社会科における地域学習の授業づくりについての考察

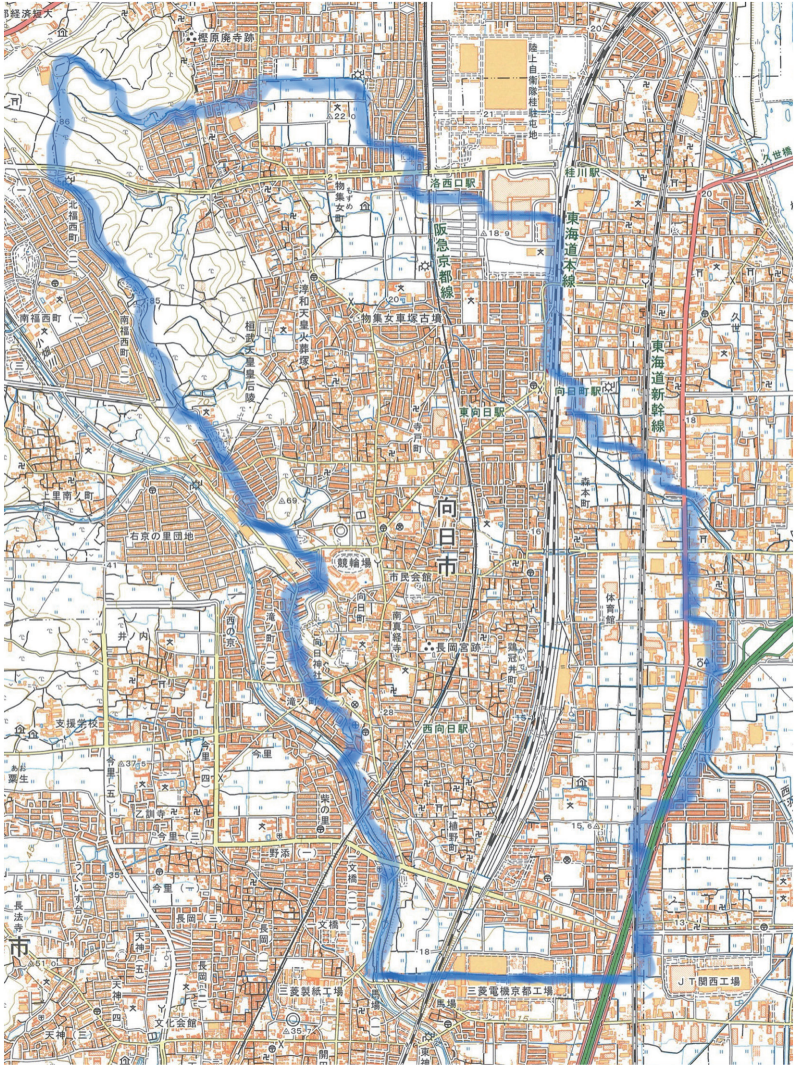


図 10

(国土地理院「2万5千分1地形図京都西南部」より筆者作成)



図 11

(筆者作成)

第1時の導入では、「わたしたちのまち・みんなのまち」で学習した学校のまわりのまちの様子を想起する。その後、約130年前の明治22年(1889年)の地形図を提示する(尚、この単元で取り上げる過去の地形図の出典は、向日市の市制施行40周年記念事業向日市文化資料館企画展〈展示図録〉『むこうし・おとくにの絵図・地図・写真—うつりかわる景観』である。現在の地形図の出典は「地理院地図 Vector」である)。そして、現在の地形図(図11)と比較をして気づいたことを書き出し、発表するように伝える。想定される子どもの意見は、「阪急電車が無い」「4向小が無い」「イオンが無い」「ほとんどが田んぼ」「ほとんど家が無い」「JR向日町駅はある」などである。そして、出された意見に対してなぜ当時はそうだったのかを予想するという活動をしていく。

第2時では、第1時で出た意見について学習をしていく。この単元ではこの後も同じように過去の地形図との比較から気づいたことを意見として

出し合い、当時はなぜそうだったのかを予想し、子どもから出た意見をもとに学習をしていく。したがって、授業者は事前に子どもから出る意見を想定して授業の準備をするが、場合によっては子どもの意見によって新たな準備をする必要もある。しかし、子どもが主体的に取り組む授業にするためには必要なことであり、授業者にとっても重要な学びとなる。つまり、こういったことを繰り返していけば子どもからどのような意見が出るのかをよりの確に想定することができるようになったり、教材づくりの幅が広がっていったりするのである。そして、この時間には「JR 向日町駅はある」という意見について学習していくことが考えられる。JR 向日町駅(当時は向日町停車場)は明治9年(1876年)7月26日の開業で、京都府下で最初に開業した駅である。開業当時は蒸気機関車が走っていたので当時の写真を提示したり、生活の様子を伝えたりしながら当時のことについて考えていく。さらに、お隣の山崎駅が同年8月、京都駅が翌年2月に開業したことや日本で最初に開業した駅は新橋駅(東京都)と横浜駅(神奈川県)であることなどを伝えることも考えられる。また、向日市のHPに向日市の「人口推移及び世帯数の推移」<sup>(31)</sup>が掲載されているので、その当時の人口を伝えることも当時の様子を考える上で有効な情報となる。そして、この頃は「向日市」ではなく「向日町」と呼ばれていたことを伝えることも考えられる。

- ・約90年前の学校のまわりのまちの様子を調べよう(3・4/17)

第3・4時では、昭和6年(1931年)の地形図を提示し、当時のまちの様子について考えていく。第3時では、まず前時の振り返りをしてから明治22年(1889年)の地形図と昭和6年(1931年)の地形図(図12)を比較して気づいたことを書き出し、発表するように伝える。想定される子どもの意見は、「道が増えている」「家が少し増えた」「4向小やイオンがまだない」「阪急電車が走っている」などである。そして、なぜ当時はそうなっていたのかを予想する。

第4時では、主に阪急電車について取り上げる。当時は新京阪鉄道株式



図 12

(筆者作成)

会社であり、開業したのは昭和 3 年(1928年)11月 1 日で、この時は高槻－西院間での開業であった。そして、開業が同年11月10日からの昭和天皇の即位式である「昭和大典」に間に合わせるためだったこと伝え、場合によっては「昭和大典」について学習したり、稲荷公園にあった伏見稲荷大社の神田について学習したりすることも考えられる。さらに、阪急になったのが昭和24年(1949年)であったことや向日市に東向日駅と西向日駅の二駅ができた経緯について学習することも考えられる。

- 約60年前の学校のまわりのまちの様子を調べよう (5/17)

第 5 時では、昭和39年(1964年)の地形図を提示し、当時のまちの様子について考えていく。第 5 時では、まず前時の振り返りをしてから昭和 6 年(1931年)と昭和39年(1964年)の地形図(図13)を比較して気づいたことを書き出し、発表するように伝える。想定される子どもの意見は、「田んぼが減っている」「家が少し増えた」「4 向小やイオンがまだない」「工場がで

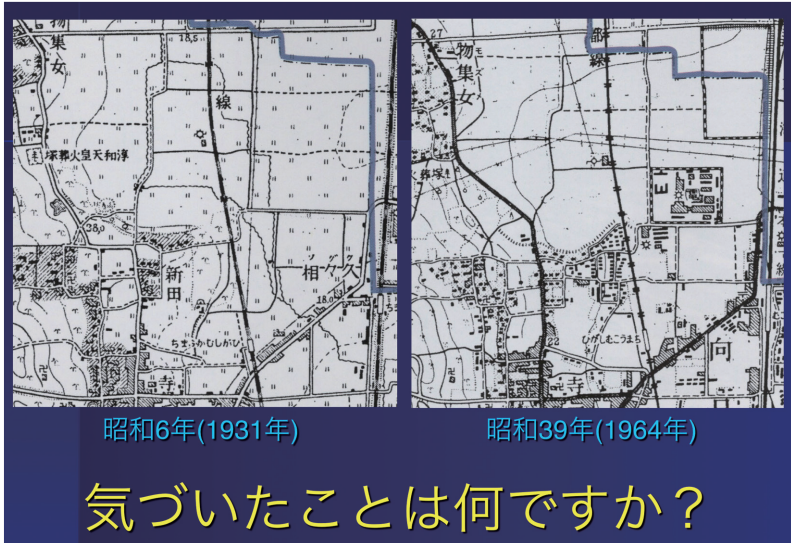


図 13

(筆者作成)

た」などである。そして、なぜ当時はそうなっていたのかを予想する。

その後、『図録 20世紀の向日町』の「昭和30年前後の向日町駅前の商店街」<sup>(32)</sup>を活用して、現在との比較をする。当時の向日町駅前の様子と現在の様子との違いや、その違いについてこれまでに学習したことや日常生活で得た知識などを活用して考えていく。想定される子どもの意見として、「桂川イオンができたから向日町駅前の商店の数が減ったのではないか。」が挙げられる。そして、ここで学習したことはこの後のイオンモール京都桂川ができたときのことや西国街道のこと、さらには現在向日町駅周辺の開発計画があることなど、まちの様子の移り変わりへと繋がってくる。また、昭和12年(1937年)にできた井上電気製作所について取り上げることも考えられる。

- 約30年前の学校のまわりのまちの様子を調べよう(6~8/17)



図 14

(筆者作成)

第6～8時では、昭和58年(1983年)の地形図を提示し、当時のまちの様子について考えていく。第6時では、まず前時の振り返りをしてから昭和39年(1964年)と昭和58年(1983年)の地形図(図14)を比較して気づいたことを書き出し、発表するように伝える。想定される子どもの意見は、「家が増えている」「4向小がある」「寺戸中学校もある」「キリンビールの工場ができた」などである。そして、なぜ当時はそうなっていたのかを予想する。

第7時では、昭和48年(1973年)に開校された第4向陽小学校や地形図上にある寺戸中学校、第2向陽小学校などの学校について取り上げていく。尚、向日市で最初にできた学校である向陽小学校についてはこの後の学習で取り上げることを考慮する必要がある。さらに、昭和43年(1968年)にできたキリンビール工場について取り上げることも考えられる。この場所には現在イオンモール京都桂川があることから子どもにとっても興味深い情報



集女駅があったことを取り上げることも考えられる。また、現在洛西口駅の南側が開発されていることを取り上げることも考えられる。最後にこれまでに上げた地形図を明治22年(1889年)から令和4年(2022年)の順に提示し、「変わっていないところは？」と問い掛ける。想定される子どもの意見は「向日町駅から東向日駅への道は変わっていない」「物集女街道も変わっていない」などである。そして、これらは第4学年で学習する「きょう土の伝統・文化と先人たち」に繋がる場所である。

- 約110年前の公共施設や交通の様子を調べよう(9・10/17)

第9・10時では、向日市の向日や鶏冠井付近を取り上げ、公共施設や交通の様子の変り変わりを見ていく。第9時では、令和4年(2022年)と明治42年(1909年)の地形図を提示する(図16)。ここで最も古い明治22年(1889年)の地形図を取り上げなかったのは、明治22年(1889年)には公共施設や交通網があまり整っておらず、現在との比較が困難だったためである。想定される子どもの意見は、「田んぼと竹林だらけだ」「線路と道の近くに家がある」「○は何かな」「学校が二つある」「交番がある」などである。そして、なぜ当時はそうだったのかを予想する。この時に「約130年前の学校のまわりのまちの様子を調べよう」や「約90年前の学校のまわりのまちの様子を調べよう」で学習したことを活用できるようにする。

第10時では、明治5年(1872年)に現在の向陽小学校の前身である勝山校、明治20年(1887年)に現在の勝山中学校の前身である乙訓高等小学校が開校したことや、「○」は明治23年(1890年)にできた向日町の役場で現在の市役所のようなところであったこと、明治26年(1893年)に向日町警察署ができたことを取り上げることが考えられる。また、なぜ道沿いや線路沿いに家(建物)が多いのかを考えることもできる。

- 約60年前の公共施設や交通の様子を調べよう(11・12/17)

第11・12時では、昭和39年(1964年)の地形図を取り上げ、公共施設や交



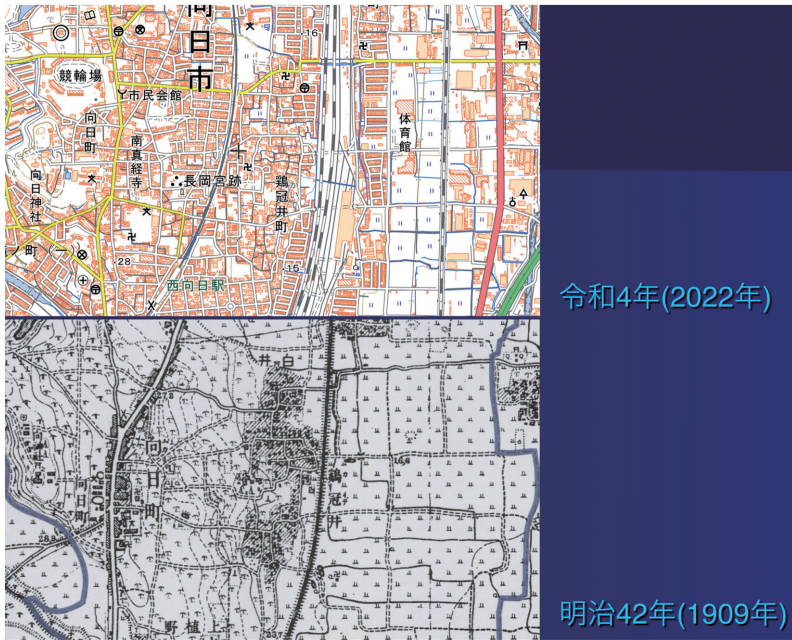
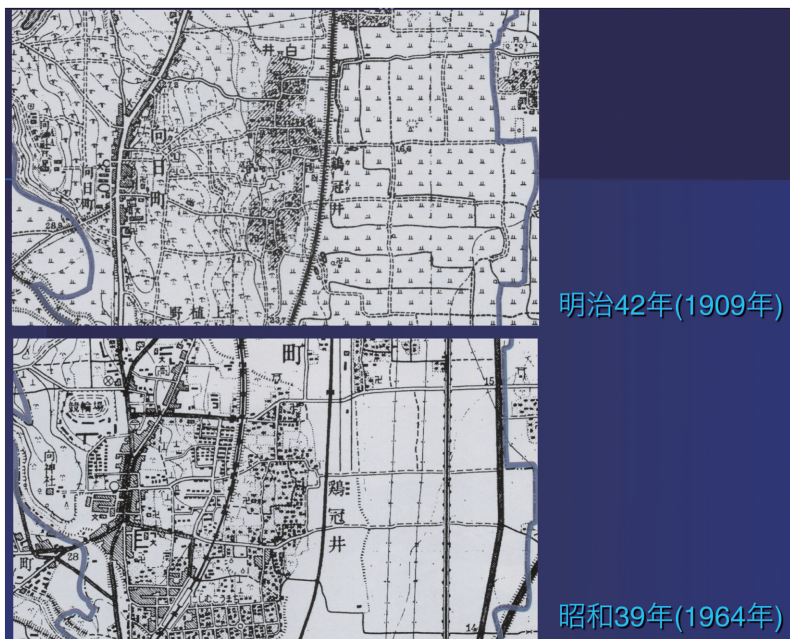


図 16

(筆者作成)

通の様子の移り変わりを見ていく。第11時では、明治42年(1909年)と昭和39年(1964年)の地形図を提示する(図17)。想定される子どもの意見は、「西向日駅と阪急の線路の近くに家が増えている」「郵便局がある」「新幹線の線路がある」「高校ができていいる」「競輪場がある」などである。そして、この時間には明治6年(1873年)に郵便局ができたことや昭和2年(1927年)に現在の京都西山高等学校の前身である西山高等女学院が開校されたこと、昭和25年(1950年)に京都向日町競輪場が開設されたこと、昭和39年(1964年)10月1日に東海道新幹線東京-新大阪間が東京オリンピック開催に合わせて開業したことなどを取り上げることが考えられる。さらに、第4時で西向日駅について取り上げていた場合は、ここでも取り上げることが考えられる。



明治42年(1909年)

昭和39年(1964年)

図 17

(筆者作成)

第12時では、昭和39年(1964年)と令和4年(2022年)の地形図を提示する(図18)。想定される子どもの意見は、「図書館ができて」「消防署ができて」「体育館ができて」「裁判所ができて」「保健所ができて」などである。そして、この時間には明治26年(1893年)1月4日に京都地区裁判所向日町出張所が開庁し、昭和22年(1947年)5月3日に向日町簡易裁判所になったことや昭和42年(1967年)4月に向日町消防本部・消防署が設置され、昭和56年(1981年)7月20日に競輪場西側に移転し、令和3年(2021年)10月18日に現在の場所に移転されたこと、昭和57年(1982年)には保健所(乙訓総合庁舎)があったこと、昭和59年(1984年)11月3日には向日市立図書館と向日市文化資料館の開会式があったこと、昭和61年(1986年)に向日市民体育館ができたことなどを取り上げることが考えられる。

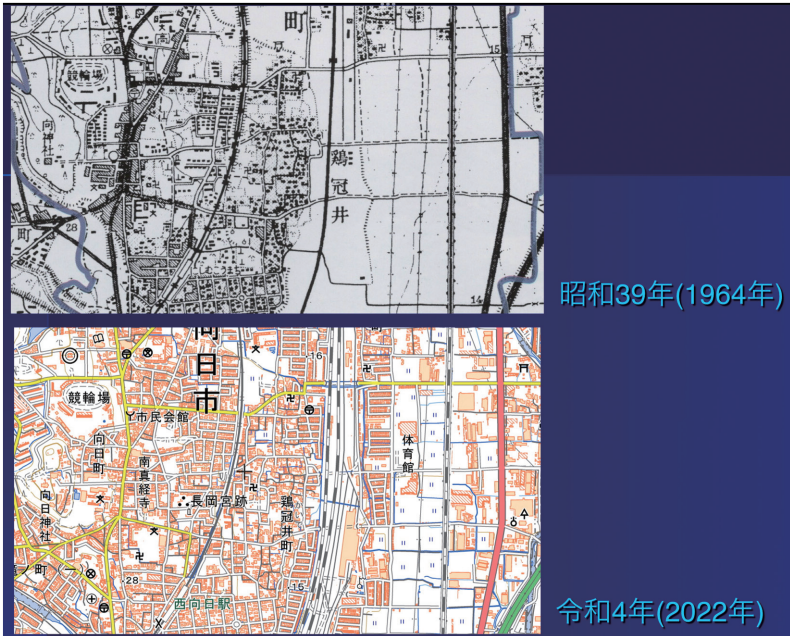


図 18

(筆者作成)

• 向日市のうつりかわりを年表にまとめよう(13・14/17)

第13・14時では、これまでに学習したことを年表にまとめる。この時、ただ学習したことを年代順に並べるだけでなく、一人ひとりが関心のあるテーマ(例えば、交通、公共施設、人口など)を設定してから年表をつくるなどの工夫をすることが考えられる。

• 人々の生活の様子のおつりかわりを考えよう(15~17/17)

第15~17時では、生活の道具を通じて人々の生活の様子のおつりかわりを考えていく。できれば、洗濯板や七輪など子どもが実際に使うことができる道具を取り上げることが望ましい。さらに、これまでに学習した内容と関連する道具を取り上げることも考えられる。また、向日市文化資料館

で毎年「くらしの道具展」が開催されているので、その展示を利用することも考えられる。

#### 4. 第4学年の地域学習

ここまで取り上げた「わたしたちのまち・みんなのまち」と「市や町のうつりかわり」は第4学年で学習する「きょう土の伝統・文化と先人たち」にも深い繋がりがある。そこで今回は授業の構想までは至らなかったが、「きょう土の伝統・文化と先人たち」で取り上げることが考えられる教材を以下に記す。尚、「きょう土の伝統・文化と先人たち」は小学校解説の第4学年の内容「(4)県内の伝統や文化、先人の働きについて、学習の問題を追究・解決する活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。<sup>(33)</sup>」に基づいている。

##### (1) きょう土の伝統・文化と先人たち

「西国街道を通った人たち」

西国街道は京都市の東寺から向日市・長岡京市・大山崎町・大阪府を通じて兵庫県西宮市まで通じる道のことで、その先は中国・九州地方(西国)へ通じる。整備されたのは安土・桃山時代であるが、奈良時代(710年～784年)の書物である『古事記』や『日本書紀』にも登場する。長岡京(784年～794年)は約10年しか存在しなかったが、その後平安京(794年～1869年)が約1000年続いている間、向日市は都から西国へ向かう、あるいは西国から都へ向かうための玄関口だったのである。つまり、交通の要衝だったのである。そう考えると現在の向日市にJR京都線、阪急京都線、東海道新幹線、名神高速道路、国道171号線が通っているのも納得ができる。そこで、西国街道を教材として取り上げることで、子どもにとって歴史的・地理的な側面から向日市を捉える機会になるのである。ちなみに、長岡京と平安京がこの地にあった理由のひとつに水利面も挙げられる。水利面でよく取り上げられるのは鴨川、桂川、宇治川などの河川であるが、地下水の存在

も忘れてはいけない。都があった当時は地面を少し掘れば地下水が湧き出てきたといわれている<sup>(34)</sup>。そして、現在の向日市でも地下水が上水として利用<sup>(35)</sup>されている。このことは、「住みよいくらしをつくる」の中の「くらしをささえる水」の学習にもつながる。

これまで西国街道を往来した人の中には歴史的に著名な人物もいる。そこで、こういった人物を取り上げることでさらに地域に対する理解が深まったり、第6学年の歴史や他教科の学習にもつながったりする。具体的な人物としては紀貫之、日像、豊臣秀吉、伊能忠敬、徳川慶喜などが挙げられる。紀貫之は日本初の日記文学『土佐日記』の作者である。『土佐日記』には932年12月21日から935年2月16日に地方官の任期を終えた主人公が土佐(高知県)から京(京都)へ帰るまでのことが記されている。その中で京に入る直前に山崎(大山崎町)から鳥坂(向日市上植野町御塔道)を通っていることがわかる記述がある。つまり、この時に紀貫之が西国街道を通ったと考えられるのである。また、『土佐日記』は古典としても親しまれているので、紀貫之を取り上げることで国語科の学習と連携をすることも考えられる。

日像は日蓮宗の僧で、京で初めて日蓮宗の布教をしたといわれている。そして、その布教が原因で京から追放される時に西国街道を通ったとされている。この時、1307年に日像は向日神社前で道ゆく人に説法をしたとされ、その時に座っていた石が「説法石」と呼ばれ、現在も向日神社前でその姿を見ることができる。さらに、向日市鶏冠井町の石塔寺で毎年5月3日の花まつりで奉納される「鶏冠井題目踊」のはじまりにも日像が深く関わっているとされている。

豊臣秀吉は安土桃山時代の戦国武将で、天下統一を成し遂げた人物である。秀吉の居城としては大坂城が有名であるが、晩年は京に聚楽第や伏見城を築くなど京都とのつながりも深い。そして、秀吉の命により前田玄以が西国街道の整備をした。特に、向日神社周辺の街並みが整えられたのもこの頃である。さらに秀吉自身も朝鮮出兵のために肥前(佐賀)に向かう途中

で西国街道を通り、向日神社のそばのお茶屋で休憩したとの記録も残っている。また、その時の様子が紙芝居にもされていて、向日市図書館で閲覧でき、貸出もされている。

伊能忠敬は、幕末に日本全国を実測して地図をつくった人物である。忠敬はその測量の途中、1814年2月18日・19日に向日神社前の西国街道にあった旅籠である富永屋に宿泊したとの記録が残されている。富永屋は2020年2月に解体されるまでの約280年間、西国街道にその姿をとどめていた。また富永屋には、江戸幕府最後の将軍である徳川慶喜も訪れたとされている。

#### 「西岡衆」

室町時代、向日市は都があった京都から西の方角に長く続く丘のあたりに広がっていてことから、西岡(にしのおか)と呼ばれていた。そこには、国衆と呼ばれる地域の指導者である武士たち(物集女氏、鶏冠井氏、竹田氏、神足氏、草島氏など)がおり、「西岡衆」と呼ばれていた。この西岡衆の紙芝居が向日市立図書館で閲覧でき、貸出もされている。その紙芝居の中で、織田信長に西岡が支配されることや室町幕府最後の将軍足利義昭の家臣から織田信長の家臣となった細川藤孝が物集女氏の当主であった物集女宗入を騙し討ちにすることなどが描かれている。この紙芝居に触れることで、室町幕府や足利義昭、織田信長などの歴史的に著名な人物と向日市に繋がりがあったことがわかる。さらに、細川藤孝については嫡男忠興が明智光秀の娘玉(のちの細川ガラシャ)と結ばれたことなどを子どもに伝えれば、向日市が歴史の大きな舞台と繋がっていたことが実感できるようになる。

#### 「旭米」

「コシヒカリ」や「あきたこまち」といえば有名なお米の品種であるが、こういった品種のもとになった「旭」という品種がつけられたのが向日市なのである。『図録 20世紀のむこうまち』によると、京都市中に生まれ、

幼くして向日町物集女の農家の養嗣子となった山本新次郎は、「当時広く栽培されていた稲の品種「日の出」と「神力」から、明治41年(1908)に悪天候にも倒れない株を見つけた。品種を選び出し栽培を重ねて、新品種として固定化することに成功<sup>(36)</sup>したとされている。「コシヒカリ」や「あきたこまち」といえば、子どもも聞いたことがあるかもしれない有名な品種である。そういった品種のもとになる品種が向日市でつくられたことは、子どもにとっても印象に残ると考えられる。しかし、現在では「旭米」を栽培する農家はほとんどなくなってしまったため、向日市の地域活性化を兼ねて「旭米」を復活させようと「一穂(いっほ)プロジェクト」<sup>(37)</sup>が立ち上げられている。「一穂プロジェクト」では、「一穂フェスタ」というイベントを定期的に開催するなどの活動をしている。こういった活動があることを知ることで、現在も様々な形で地域を思う人々がいることを子どもが知ることができる。さらに向日市在住の紙芝居屋らっきょむが旭米の紙芝居を制作し、「一穂フェスタ」や向日市内の小学校、放課後児童クラブでの公演を行なっている。この公演を子どもに見せるのも効果的であると考えられる。

### Ⅲ. 意義と問題点からの考察

前章では、筆者の地域学習の授業づくり(構想)について記した。本章では地域学習の意義と問題点、前章の地域学習の授業づくり(構想)をもとに、地域という教材の魅力を十分に引き出すための授業づくりについて考察していく。

#### 1. 見慣れた場所であること

地域学習の意義では、子どもにとって身近な地域は社会科の学習を行う上で魅力的な場(教材)であるとされている。しかし問題点として、子どもに問題意識(問い)を持たせたり、子どもの考えを深めさせたりするための

教材を見つけることが容易ではないということが挙げられている。このような矛盾が生じるのは一体なぜなのだろうか。その理由のひとつとして、身近な地域は子どもにとって見慣れた場所であり、特に新鮮さや感動がない場所であることが挙げられる。つまり、この矛盾を解消するためには、子どもが身近な地域を新鮮さや感動がある場所だと認識できるようにする必要がある。そのためには、まずは授業者が好奇心を持って地域のことを調べる必要がある。筆者の場合、向日市に好奇心を持つきっかけとなったのが、稲荷公園と伏見稲荷大社との繋がりであった。Leslie(2014)は、ピアジェの指摘から、「人の好奇心が引き起こされるのは、予測したことと実際に起こったことの不一致に気づいた時で、それは考えていたことや知っていたことと実際に見たことに矛盾を感じた時である<sup>(38)</sup>」としている。つまり、矛盾を感じ、違和感を覚えた時に好奇心を持つのである。筆者の場合、向日市の稲荷公園と伏見稲荷大社に繋がりはないと認識していたので、あの看板を読んだ時に矛盾を感じ、違和感を覚えたのである。

それでは矛盾を感じる、あるいは違和感を覚えるためにはどうすればいいのだろうか。朝倉(1989)が、「地域には児童生徒が見ようとすれば見ることのできる教材が豊富に存在する<sup>(39)</sup>。」としているように、最初に授業者が地域を見ようとすることが必要である。それでは、「見ようとすること」とは具体的にどのようにすることなのであろうか。まずは物理的に何かを見ることである。今回であれば筆者が稲荷公園の看板を読んだという行為のことである。次に現実を認識することである。今回であれば筆者が看板に書いてあった内容を理解することである。そして、理解した現実と既知のこと(数少ない単純な理論)<sup>(40)</sup>を比較することである。さらに、理解をして比較をする時には様々な視点が必要となる。様々な視点とは朝倉(1989)が、「地理学・歴史学・政治学・経済学・社会学・民俗学・文化人類学等々、社会科を支えている諸科学がこれまで積み上げてきた原理・法則などを、地域の具体的事象の学習を通して発見させるところに、地域学習の醍醐味がある<sup>(41)</sup>。」としているように、地理学・歴史学・政治学・経済学・社会学



・民俗学・文化人類学等々の視点である。しかし、それぞれの学問で使用されている専門用語はその学問に携わっている者以外には理解するのが難しい用語が多い。そこで、様々な視点から理解して比較をするために使用するの一般的な言葉が最適である。具体的には、場所(どこ、近く、遠く)【地理的】、時間(いつ、昔、今)【歴史的】、お金(いくら、何円)【経済的】などが挙げられる。今回であれば筆者は稲荷公園と伏見稲荷大社の場所【地理的】に着目したのである。「稲荷公園の近くに伏見稲荷大社はない」、あるいは「稲荷公園の遠くに伏見稲荷大社がある」ので稲荷公園と伏見稲荷大社には繋がりが無いと思っていた(既知のこと：数少ない単純な理論)のである。しかし現実には、稲荷公園と伏見稲荷大社には繋がりがあったのである。このことが矛盾、あるいは違和感の正体だったのである。このように、専門用語を使うより自分自身が使い慣れた言葉を使う方が理解して比較をするときに実感<sup>(42)</sup>を伴うのである。もちろん、専門用語を使い慣れているのなら専門用語を使っても実感を伴うことはできるであろう。ただ、子どもであれば尚更自分自身が使い慣れた言葉を使うことが最適であるといえる。さらに、諸科学がこれまで積み上げてきた原理・法則などについても次のようなことがいえる。社会科に関する学問の原理・法則は具体的事象から導き出された仮説なので、それらはあくまで参考として扱うべきである。そして、その具体的事象は日常における、或いは授業における子どもの活動の中にあるのである。だからこそ、専門用語を使うよりも自分自身が使い慣れた言葉で地理的、歴史的、経済的な視点から身近な地域を理解して比較をするべきである。なぜなら、そうすることで具体的事象をより直接自分で見ようとすることができるからである。自分で見ようとすることにより、実感を伴って見ようとすることができ、より具体的事象を自分ごととして捉えることができるのである。諸科学の積み上げてきた原理・法則あくまで他者が見つけたものであり、それは「意味のない」記号の世界であるともいえる。だからこそ、それらを自分にとって意味のあるものにするために大切なのは原理・法則に辿り着くまでの過程を自分で辿

ることなのである。そこで、まずは授業者がその過程を実感を伴いながら辿る必要がある。その入り口として、具体的事象を地理的、歴史的、経済的な視点から見ようとして矛盾を感じたり、違和感を覚えたりすることが必要なのである。そして、こういった活動を繰り返すことによって使い慣れた言葉(語彙)の数が増えてくる。また、それが増えると専門用語やその概念を獲得する(自分のものにする)こともできるのである。

さらに、この一連の行為をするためには動機付けが必要となる。今回であれば、筆者がよく施設にある看板を読んでいることや何度も社会科の授業づくりをやっていること、伏見稲荷大社の境内に伯父の店があることなどが動機付けになったと考えられる。そして、この動機付けをさらに突き詰めていくと、よく看板を読む(歴史が好き)、何度も授業づくりをやっている(社会科が好き)、伯父の店がある(伏見稲荷大社に親しみがある)といった、感情に繋がることがわかる。もちろん、感情を完全に操作することはできない。しかし、繰り返すことや長い時間をかけてやることで「好き」や「親しみ」といった感情を持つことができる可能性が高まることはある。そして、こういった感情を持てばより地域(教材)を見ようとして、矛盾を感じたり、違和感を覚えたりして、それが好奇心を持つことに繋がるのである。そして、授業者が地域(教材)に好奇心を持てば、地域について広く深く調べることができる可能性が高まるのである。

## 2. 新鮮さと感動がある場所へ

前節では、子どもにとって身近な地域は社会科の学習を行う上で魅力的な場(教材)であるにも関わらず、子どもに問題意識(問い)を持たせたり、子どもの考えを深めさせたりするための教材を見つけることが容易ではないことが挙げられているという矛盾が生じる理由と、その解決策のひとつである授業者が好奇心を持って地域のことを調べるができるようになるための方策について記した。

この後は、授業者が地域(教材)について詳しく調べながら、調べた教材

をもとに授業づくりに取り組んでいく。その過程でも、「見ようとする  
こと」が重要になる。つまり、物理的に何かを見て、現実を認識して既知の  
こと(数少ない単純な理論)と比較をすることである。そして、子どもが身近  
な地域を新鮮さや感動がある場所だと認識できるような授業にしていくた  
めには、授業者だけでなく子どもが「見ようとする」ことができるよう  
になることも必要となる。また、「見ようとする」ことは閃き(暗示)と論  
理の相互作用を生み出すともいえる。なぜなら、見ようとして実際に見る  
ことで矛盾を感じたり、違和感を覚えたりする。そして、そのことが閃き  
(暗示)の生起に繋がり、矛盾や違和感を解消したいと思うことが閃き(暗  
示)を論理的に説明しようとすることに繋がるのである。この工程を繰り返  
していくと閃き(暗示)と論理の相互作用によって、身近な地域が新鮮で  
感動があるものになるのである。

そのために授業者は授業において様々な仕掛けをしなければならない。  
具体的には、今回の授業づくり(構想)でいえば、「第4向陽小学校のまわ  
りのまちは、どんなまちだと思いますか?」といったような問い掛け(発  
問)をすることが必要となる。この発問について吉本(2006)は、「発問にお  
いては問いを発することによって相手が意識していなかった問題に気づか  
せたり、思考活動を刺激したり、表現活動を誘発・促進したりすることが  
本質なのである。つまり、そこでは正しい答や結果がでるか、でないか  
ではなくて答を生み出すためにどれだけ意味のある思考活動や表現活動がな  
されたかどうか(44)がむしろ決定的に重要なのである。」としている。つまり、  
発問によって子どもが見ようするようになるのである。「第4向陽小学校  
のまわりのまちは、どんなまちだと思いますか?」という発問の中には先  
述の通り、閃き(暗示)と論理の相互作用を生み出すための要素が含まれて  
いる。つまり、見慣れている場所だから何でもわかっていると思い込んで  
いる(数少ない単純な理論)からこそ、見慣れている場所についてわからない  
ことがあると矛盾を感じたり、違和感を覚えたりしやすくなるのである。  
しかし先述の通り、この発問をするためにはかなりの準備が必要であり、

準備を怠るとその効果は薄れてしまう、或いは思考活動や表現活動を阻害してしまうことにもなる。この後も「わたしたちのまち・みんなのまち」では、地形図を子どもに提示して「気づいたことは何ですか？」と発問をするが、既習事項(まちたんけんで見たまちの風景、地図記号や等高線などの地形図の読み方、前時に見た地形図など)をもとに、本時で提示する地形図から子どもが気づくであろうことを予想しながら、授業者が気づいてほしいことに辿り着くようにしなければならない。そのためには、本時で提示する地形図に気づいてほしいことに繋がるのが表記されていなくてはならない。さらに、その他のことも適度に表記されている必要がある。なぜなら、必要なことのみが表示されていれば発見は容易いが、最初から正解がわかっているなぞなぞのようでは子どもの意欲も高まらない。そこで、日頃の子どもの様子からどの程度のことが提示されていれば子どもの意欲が高まるかを考えて地形図を提示する必要がある。さらに、現実の社会は混沌としている。つまり様々なことが乱立している。その中で子どもは生きていく必要がある。それならば、社会科の授業の中でも擬似的ではあってもそういった状況をつくり、その中で子どもが考えていくようにする必要がある。また、授業者の想定では必要だと思われていなかったことが見方を変えれば必要なこととなったり、他のことと結びついて新たなことに繋がったりすることもある。もちろん、授業者ができるだけ想定をしておく必要があるが、授業での子どもの閃き(暗示)がその想定を越えてくることもあり、それは歓迎すべきことなのである。しかし、その時に授業者が対応を間違えると子どもの閃き(暗示)を無碍に否定してしまうことになる。では、そうならないためにはどうすればいいのだろうか。まずは、子どもの閃き(暗示)が授業者の想定を越えたものかどうかを適切に判断できるかどうか重要となる。この適切な判断ができるようになるためには授業の方向性をある程度明確にしておくこと、教材に関係することを中心とした幅広い知識と経験則が必要となる。一つ目の授業の方向性とは、授業者の教育観に基づいた社会科観(社会科という教科をどのように捉えているのか、社会科の

授業を通して目指していること等)、具体的には子どもに示した「社会科で何を学ぶのか」の内容と学習指導要領に基づいた単元及び本時の目標が目指すところである。筆者の場合、社会科観の「社会科で何を学ぶのか」は、先述の通り「社会で、人々がどのようにしておたがいなたすけ合って生活をしているのか、そのひみつにせまる！」である。学習指導要領に基づいた「わたしたちのまち・みんなのまち」の単元の目標は、「身近な地域や市の様子を捉え、場所による違いを考え、表現すること。」である。これらを基に目指すべき方向性を設定するのであるが、それはイメージとしては末広りの扇形である。もしくは、野球のフィールドに例えてもいい。そして、子どもの閃き(暗示)が打球だとして目指すべき方向性に沿っているのかを見極めるのである。そして、フェアゾーンの外野のフェンスを越えれば授業者の想定を越えたことになるのである。この目指すべき方向性のフィールドの大きさが目の前の子どもにとって適度な広さであれば、授業での子どもにとって意味のある思考活動や表現活動は活発になる。さらに、ファウルゾーンはできるだけ広い方がいいと考えられる。なぜなら、その方が子どもの閃き(暗示)が目指すべき方向性から外れたとしても、その閃き(暗示)を授業の他の場面で活かすことができるかもしれないからである。このことは、二つ目の教材に関係することを中心とした幅広い知識を持つことにも繋がる。幅広い知識を持っていれば、前述の目指すべき方向性の例えの野球のフィールドの広さを目の前の子どもに合わせて自在に変えることができる。しかし、幅広い知識を持っていなければフィールドの広さを十分に確保できなくなる。さらに、幅広い知識は観客席も含めた野球場全体であると例えることもできる。つまり、教材には直接繋がりのない分野も含めた幅広い知識があればあるほど観客席も広くできると考えると、授業者の想定を越えた閃き(暗示)があっても観客席の範囲にとどまれば授業者が何とか対応できるといえる。さらに、ファウルゾーンの観客席が広いということは、閃き(暗示)がその授業が目指すべき方向性から外れていたとしても観客席の範囲にとどまれば、この先の授業や他教科の授

業に活かせる可能性が出てくるといえる。そして、前述の二つの項目を支えるのが三つ目の授業者の経験則である。経験則とは一般的な理論とは違い、授業者個人の理論であり再現可能性はない。なぜなら、授業は生身の人間が織りなすその場限りの行為だからであり、例え同じような授業はできたとしても、全く同じ授業はできないのである。この理論と授業の関係について森分(1984)は、「授業は非常に多くの要因が複雑に絡み合って成立しているが、理論はそのいくつかの部分・側面しか把握し客観化しない。理論にもとづいて授業を構成しようとしても、理論化されていない部分・側面が関係するので、授業は必ずしも成立していかない。提示される理論と具体的な内容についての間には大きなへだたりがあり、それを個々の教師がうめてゆかなければならない。理論通りの授業の成立は、なお名人芸<sup>(45)</sup>にゆだねられる部分が大きいわけである。」としている。つまり、個々の教師がうめてゆかなければならないところを埋めるためには経験則が必要なのである。例えば、過去の具体的事例から導き出された一般的な理論「地域は社会生活の原則を発見させるなど、「現代社会」の理解のための知的土台を築く場である。」を用いて具体的な教材「向日市の地形図」で授業づくりをする場合、まずは授業者が「向日市の地形図」から「社会生活の原則」を見つけなければならない。そこで、「駅の近くには建物が多い」という社会生活の原則を授業者自身が見つけた場合は、この経験を授業に活かすことができる。なぜなら、授業者自身が地形図から「駅の近くには建物が多い」という社会生活の原則を見つけるまでの過程を経験しているので、その経験を活かして子どもが地形図から「駅の近くには建物が多い」という社会生活の原則を見つけるための仕掛けを考えることができるのである。もし、指導書などに「駅の近くには建物が多い」という社会生活の原則が書いてあり、それをもとに仕掛けを考える場合には、やはり経験則がない分、精度の高い仕掛けが考えられない可能性が高くなる。さらに、仕掛けを考えても実際に授業で実践しないと子どもがどんな反応をするかはわからない。そして、子どもの反応にうまく対応できる場合もあ

ればそうではない場合もある。それでも子どもの実際の反応を感覚として受け止め、それに何らかの対応をしたという経験の積み重ねが経験則になっていくのである。もちろん、経験則の精度を高めるには多くの経験をすることと経験をした直後に振り返りをする必要があるとなる。振り返りでは論理を使い、後付けで構わないので、「あの場面はこんな対応をすればよかったのではないだろうか。」ということ(反実仮想)をできるだけたくさん自分の中で挙げておくのである。そうすれば、この後の授業づくりで仕掛けを考えると時の材料や授業実践で子どもの反応に対応する時の対応策の選択肢が増えるのである。また、経験則はやがて授業者の感覚になっていくのである。このように経験則が感覚になることで、仕掛けを考える時間を短縮できるだけではなく、目指すべき方向性をどの程度明確にすればいいのか、あるいは授業のためにどのような知識を持てばいいのかということ(46)がわかってくる。そして、これらのことが授業づくりの時間短縮と精度の向上につながるのである。そして、経験則が感覚になることで最も効果が発揮されるのが授業実践の場面である。その中でも子どもの反応への対応は感覚に頼らなければならない。なぜなら、授業中に子どもの反応への対応を考える時間は限られているからである。さらに子どもの反応は子どもによって違うのはもちろんのこと、同じ子どもでもその日の体調や気分によって変わったり、仲間の反応によって変わったりすることもある。さらに学級集団が違えば同じ発問をしてもその反応は変わってくる。このように、どのような授業実践の場面にも対応できるようにするために授業者は感覚を磨き続けなければならないのである。感覚を磨き続けるというのは、経験則の精度を高めていくことである。このように発問と子どもの反応への授業者の対応によって、子どもが使い慣れた言葉で実感を伴い、身近な地域を自分ごととして捉えることができれば、見慣れた身近な地域が新鮮さと感動がある場所へと変わっていくのである。

さらに、身近な地域の中の地理的、歴史的に有名なこととの繋がりを活用することも重要となる。具体的には、向日市にはJR京都線、阪急京都

線、東海道新幹線、国道171号線、名神高速道路が通っていることから、向日市が交通の要衝であることがわかる。そして、このことに違和感を覚え、なぜ向日市が交通の要衝になったのかという問いを持つことができれば、かつて長岡京があったこと、そして平安京ができたこと、その平安京から中国・九州地方へ通じる西国街道があったことに繋がりを見出せる可能性が高まる。そして、その西国街道を紀貫之、日像、豊臣秀吉、伊能忠敬、徳川慶喜などの歴史的に有名な人物が通ったことにも繋げることができる。さらに、その向日市が今では西日本で一番、全国でも三番目に面積が狭い市であることがわかれば、子どもにとって新鮮さと感動を与えることができるかもしれない。その上で、向日市での現在や過去の人々の生活の様子を考えることができれば、子どもにとって向日市がさらに新鮮さと感動がある場所になるのである。

### 3. カリキュラム・マネジメントの視点から

さらに、地域学習の準備には多くの時間が費やされるといった問題点が挙げられているが、これまで述べてきた通り、地域学習の準備には多くの時間が必要である。ただし、経験則が感覚になっていけば準備の時間を減らすことは可能である。しかし、経験則が感覚になるまでにもかなりの時間を必要とする。そのため、基本的には授業者が授業準備である教材研究に十分な時間を充てることができるようにする必要がある。そこで活用したいのがカリキュラム・マネジメントである。カリキュラム・マネジメントとは小学校学習指導要領(平成29年告示)解説総則編(以下、小学総則)によると、「学校教育に関わる様々な取組を、教育課程を中心に据えながら組織的かつ計画的に実施し、教育活動の質の向上につなげていくこと<sup>(47)</sup>」とされている。その中で、「教育課程の実施に当たっては、人材や予算、時間、情報といった人的又は物的な資源を、教育の内容と効果的に組み合わせる<sup>(48)</sup>」とされており、この中の「時間」については前述の通り、教材研究の時間の確保に繋げていくことが望まれる。さらに、



「特に、教師の指導力、教材・教具の整備状況、地域の教育資源や学習環境(近隣の学校、社会教育施設、生徒の学習に協力できる人材等)などについて客観的かつ具体的に把握して、教育課程の編成に生かす必要がある。」と<sup>(49)</sup>されている。この中の「社会教育施設」については、十分に活用することが望まれる。今回の授業づくり(構想)では、向日市文化博物館と向日市立図書館を十分に活用した。こういった社会教育施設は日本全国各地にあるので、その活用方法についても経験則から感覚として身につけることができれば、どの地域の学校へ行っても活用できると考えられる。さらに、教具については2万5千分1地形図の活用が望まれる。なぜなら2万5千分1地形図は国の基本図で日本全国を網羅しているので、日本のどの学校でも活用が可能である。さらに、今回の授業づくり(構想)でも活用した「地理院地図 Vector」も活用することができる。そこで、2万5千分1地形図の活用についても経験則を積み上げていけば、どの学校へ行っても有効に活用できると考えられる。そして、副読本に関しても教材の一部として活用すれば、さらに有効活用できると考えられる。そして筆者の提案であるが、現在日本全国各地で地域学習の副読本がつくられているが、それらを日本全国の学校であればどこでも閲覧、又は活用できる環境を整えれば地域学習だけに留まらず、社会科全体の学習にとって有効活用できるのではないかと考える。もちろん著作権や管理、費用などの問題があるが、実現すれば資料としても価値があるものになると考えられる。最後に教具について忘れてはいけないのが、やはり地域そのものである。つまり、「まちたんけん」をはじめとしたフィールドワークを行うことである。そうすることで、先述の地域学習の意義である「地域は子ども自らが目や耳を使って学習しながら社会科の学習能力を育成する場である。」を活かすことができる。逆に行わなければ意義がなくなってしまう。だからこそ、本節で触れたカリキュラム・マネジメントを活用して、フィールドワークを実施できるようにしたい。そして、フィールドワークを実施して地域の人々と触れ合うことができれば、「地域は人間と人間の結び付き方を学び、社会

参画の態度を形成できる場である。」という意義も活かすことができ、何よりフィールドワーク前後の教室での学びが充実するのである。このことについては、小学総則の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善において、「主体的・対話的で深い学びは、必ずしも1単位時間の授業の中で全てが実現されるものではなく、(中略)単元や題材など内容や時間のまとまりをどのように構成するかというデザインを考えることに他ならない。」<sup>(50)</sup>とされている。このように、地域学習も主体的・対話的で深い学びであるべきだと考えるのなら、やはり単元の構成を考える時にフィールドワークの位置付けは重要となる。なぜなら、子どもが目や耳を使って学習をすることで実感を伴う学習になり、その実感から想像をしてその後の学習を進めることができるのである。そうすることで、想像をするための拠り所ができるので想像をしやすくなるのである。実感という拠り所があることで遠く離れた場所や人のことを想像できたり、あるいは実感とは違うことに出会った時には矛盾を感じたり違和感を覚えたりして、そのことが閃き(暗示)という形で想像に繋がるのである。このようにカリキュラム・マネジメントを活用することで地域学習の意義を活かしたり、問題点を解決したりすることに繋がるのである。

#### IV. 教科等横断的な視点からの考察

前章では、地域学習の授業づくり(構想)から地域学習の意義と問題点の両方がなぜ存在するのかを考察し、さらに問題点の解決方法も提示した。その中でカリキュラム・マネジメントを取り上げたが、カリキュラム・マネジメントでは、「教育の目的や目標の実現に必要な内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと」<sup>(51)</sup>ともされている。この教科等横断的な視点を取り入れることで、社会科の地域学習としての授業づくりや実践したことが他教科や他領域でも活用することができるのである。そうすることで、教材研究の時間を短縮できるだけではなく、子どもにとっても地域を

様々な側面から見たり考えたりすることができるのである。これは現在の学習指導要領で謳われている「見方・考え方」を働かせることにも繋がる。そして、子どもがひとつの物事を「見方・考え方」を働かせて捉えるという経験を重ねて感覚にすることができれば、様々な物事を「見方・考え方」を働かせて捉えることができるようになるのである。

そこで本章では、道徳科、総合的な学習の時間、特別活動で今回構想した地域学習が具体的にどのように活用できるのかを考察していく。

## 1. 道徳科

小学校学習指導要領(平成29年度告示)解説特別の教科道徳編では、「道徳教育は、学校や児童の実態などを踏まえ設定した目標を達成するために、道徳科はもとより、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて行うことを基本として、あらゆる教育活動を通じて、適切に行われなくてはならない。」<sup>(52)</sup>とされている。つまり、道徳科は他教科、他領域との連携を前提としている。そういった意味では、社会科の地域学習と道徳科を教科等横断的な視点で組み立てていることは難しいことではない。さらに、第2節道徳科の目標の2道徳性を養うために行う道徳科における学習(1)道徳的諸価値について理解するにおいて、「指導の際には、特定の道徳的価値を絶対的なものとして指導したり、本来実感を伴って理解すべき道徳的価値のよさや大切さを観念的に理解させたりする学習に終始することのないように配慮することが大切である。」<sup>(53)</sup>とされている。つまり、道徳的価値のよさや大切さを実感を伴って理解することが重視されているのである。このことを今回構想した地域学習との繋がりで考えると、目指している方向性は同じであるといえる。さらに、(3)物事を多面的・多角的に考えるにおいては、「二つの概念が互いに矛盾、対立しているという二項対立の物事を取り扱うなど、物事を多面的、多角的に考えることができるよう指導上の工夫をすることも大切である。」<sup>(54)</sup>とされている。つまり、矛盾を感じたり、違和感を覚えたりすることも重視

されているのである。

そして内容項目では、「希望と勇気、努力と強い意志」「真理の探究」「感謝」「礼儀」「勤労、公共の精神」「伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度」「自然愛護」「よりよく生きる喜び」で、今回構想した地域学習が活用できると考えられる。具体的には、「希望と勇気、努力と強い意志」では、現在のJRや阪急といった鉄道の開設に携わった人々や山本新次郎、一穂プロジェクトに携わっている人々や紙芝居屋らっきよむを取り上げることが考えられる。紙芝居屋らっきよむを取り上げるのなら、旭米の紙芝居をどのようにして制作したのかを聞くことで、旭米や山本新次郎への理解もさらに深まると考えられる。「真理の探究」でも、山本新次郎を取り上げることが考えられる。「感謝」と「礼儀」では、地域学習で関わった向日市の人々を取り上げることが考えられる。やはり実際に関わりがある人を取り上げることによって感謝の気持ちや礼儀の必要性を考えることにも実感と伴うことができる。「勤労、公共の精神」では、「勤労」で山本新次郎、市役所・図書館・警察署・消防署・体育館・簡易裁判所・郵便局・病院・競輪場などの公共施設で働く人々、「公共の精神」でこれらの公共施設を利用する立場から取り上げることが考えられる。公共施設をうまく活用すれば、公共施設でサービスを提供する側と受ける側の両方から「勤労、公共の精神」について考えることができる。「伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度」については、地域学習全体で学ぶことができる。「自然愛護」では、向日市の変化を取り上げることが考えられる。地形図で向日市を過去から現在の流れで見えていくときに、自然の減少が手に取るようにわかる。しかし、自然が減少したことによって生活が便利になったという側面もある。こういった矛盾から閃き(暗示)が生じやすい環境をつくることができる。「よりよく生きる喜び」では、山本新次郎、一穂プロジェクトに携わる人々、紙芝居屋らっきよむなどの具体的な人物を取り上げることが考えられる。尚、道徳科の内容項目は中学校の道徳科へも引き継がれているので、例示した地域学習の内容が中学校の道徳科でも活用

できると考えられる。

## 2. 総合的な学習の時間

小学校学習指導要領(平成29年度告示)解説総合的な学習の時間編の第1章総説2 総合的な学習の時間改訂の趣旨及び要点(2)改訂の要点③学習内容、学習指導の改善・充実に、<sup>(55)</sup>「自然体験やボランティア活動などの体験活動、地域の教材や学習環境を積極的に取り入れることなどは引き続き重視することを示した。」とされているように、総合的な学習の時間と地域の教材との繋がりは重視され続けている。そして、第2章総合的な学習の時間の目標第2節目標の趣旨1 総合的な学習の時間の特質に応じた学習の在り方(1)探究的な見方・考え方を働かせるには、「探究的な学習における児童の学習の姿」が示されており、その中で「児童は、①日常生活や社会に目を向けた時に湧き上がってくる疑問や関心に基づいて、自ら課題を見つけ」「事象を捉える感性や問題意識が揺さぶられて、<sup>(56)</sup>学習活動への取組が真剣になる。」とされている。つまり、矛盾を感じたり、違和感を覚えたりして閃き(暗示)が生起され、矛盾や違和感を解消したいという思いから、閃き(暗示)を論理を使って説明しようとするのが総合的な学習の時間の中でも重視されているのである。さらに、各教科等における見方・考え方を総合的に働かせることの一例として、「実社会・実生活の中の課題の探究において、言葉による見方・考え方を働かせること(対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めること)<sup>(57)</sup>」とされている。つまり、言葉を通じて認識や比較をすることが重視されている。そして、その時に自分自身が使い慣れた言葉を使うことによって実感を伴うことができる。実感を伴うことによって学習により主体的に取り組めるようになり、その学習の過程で言葉による見方・考え方を働かせることで語彙が増え、増えた語彙を使い続けることで使い慣れた言葉の数も増えていくのである。また、2 総合的な学習の時間で育成することを目指す資質・能力の中で、「具体的・個

別的な事実だけでなく、それらが複雑に絡み合っている状況についても理解するようになる。その知識は、教科書や資料集に整然と整理されているものを取り込んで獲得するものではなく、探究の過程を通して、自分自身で取捨選択し、整理し、既にもっている知識や体験と結び付けながら、構造化し、身に付けていくものである。<sup>(58)</sup>「実社会や実生活には、解決すべき問題が多方面に広がっている。その問題は、複合的な要素が入り組んでいて、答えが一つに定まらず、容易には解決に至らないことが多い。」<sup>(59)</sup>「具体的な事象を比較したり、関連付けたりして、そこにある矛盾や理想との隔たりを認識する（中略）同一の学習対象でも、個別に追究する児童の課題が多様であれば、互いの情報を結び合わせて、現実の問題の複雑さや総合性に気付くこともある。（中略）複数の情報を組み合わせて、新しい関係性を創り出すことも重要である。」<sup>(60)</sup>とされている。つまり、混沌としている現実社会を教材として、その中で子どもが考えるようにすること（比較や関連付け）を重視しているのである。こういった意味でも今回構想した地域学習と総合的な学習の時間の繋がりは強いといえる。そして、第4章指導計画の作成と内容の取扱い第2節内容の取扱いについての配慮事項では、「地域には、豊かな体験活動や知識を提供する公民館、図書館や博物館などの社会教育施設等や、その地域の自然や社会に関する詳細な情報を有している企業や事業所、社会教育関係団体や非営利組織等の各種団体がある。また遺跡や神社・仏閣などの文化財、伝統的な行事や産業なども地域の特色をつくっている。この時間が豊かな学習活動として展開されるためには、学習の必然性に配慮しつつ、こういった施設の利用を促進し、地域に特有な知識や情報と適切に出会わせる工夫が求められる。（中略）こうした地域のもつ教育力を活用することは、この時間の目標をよりよく実現することにつながるだけでなく、次のような教育的効果をもたらす。一つは、学習活動を地域の中で行ったり、その成果を保護者も含めた地域の人々に公開することにより、児童が社会の一員であることを自覚したり、児童の学習意欲が向上したりすることになる。次には、学習活動を通して、

児童が地域の人々と親密になったり、地域の教育機関の利用に慣れたり、地域の自然や文化財等に関心をもったり、地域の伝統行事に等に参加したりするようになり、児童が地域への愛着を高め、豊かな生活を送ることにつながる。さらには、郷土を創る次世代の人材育成や持続可能な地域社会の形成にもつながるものと考えられる。<sup>(61)</sup>とされていることから、総合的な学習の時間における地域の教材としての価値が高いことがわかる。

そして内容については、「地域の人々の暮らし、伝統と文化など地域や学校の特色に応じた課題」<sup>(62)</sup>などを踏まえて設定することとされている。今回構想した地域学習の内容であれば、イオンモール京都桂川周辺や阪急洛西口駅周辺、JR向日町駅周辺の開発などから向日市の未来、目指すべき姿について探究していくことが考えられる。その時に、他地域の開発との比較だけではなく、開発という視点で向日市の歴史をもう一度見つめ直すことも考えられる。さらに、中学校で同様の内容で探究していくことも考えられる。もし、子どもが小学校と中学校の両方でこの課題を探究したのなら、自分自身の見方や考え方の変化や開発の様子が数年単位で変わっていることが認識できるのではないかと考えられる。

### 3. 特別活動

小学校学習指導要領(平成29年度告示)解説特別活動編(以下、小学校特活)の第2章特別活動の目標第1節特別活動の目標の中で、「「人間関係形成」, 「社会参画」, 「自己実現」の三つの視点が、育成を目指す資質・能力に関わるものであると同時に、それらを育成する学習過程においても重要な意味をもつということは、特別活動の方法原理が「なすことによって学ぶ」ということにある。<sup>(63)</sup>とされている。つまり、実際にやってみるとということが重視されているのである。このことは今回構想した地域学習だけではなく、実際に「まちたんけん」をはじめとしたフィールドワークに行くことによって学ぶことに繋がっている。このように「なすことによって学ぶ」場合、「なしている」時以上にその前後の学習を重視しなければならない

い。このことは小学校特活にも、「特別活動における「深い学び」の実現には、特別活動が重視している「実践」を、単に行動の場面と狭く捉えるのではなく、課題の設定から振り返りまでの一連の活動を「実践」と捉えることが大切である。」とされている。<sup>(64)</sup> 具体的には「まちたんけん」の場合、子どもがまちたんけんに行くまでに、「まちたんけん」に行きたいと思う動機付けやまちたんけんに行ってもどうしても解決したいと思う課題を持つことが重要となる。そのためには何度も繰り返しているが、矛盾を感じることや違和感を覚えること、そして閃き(暗示)の生起が必要となる。このような子どもにとって必要なことが生み出される環境をいかにして授業者がつくるのかということが問われるのである。さらに、「まちたんけん」後の振り返りも重要で、振り返ることで「まちたんけん」で学んだことを整理する過程やその結果から再び矛盾を感じたり違和感を覚えたりして、閃き(暗示)が生起されて新たな課題が見つかるのである。また、「学級や学校は、児童にとって最も身近な社会である。」<sup>(65)</sup>とされている。そこで、地域という社会と学級や学校という社会を比較することで矛盾を感じることや違和感を覚えることがあるかもしれない。そして、「実際に学級や学校の生活をよりよくするための活動に全ての児童が取り組むことを通して、そのよさ、大切さを、一人一人が実感を伴って理解できるようにすることが大切である。」<sup>(66)</sup> さらに「学校行事における様々な感動体験の場」とされているように、特別活動でも実感や感動を伴うことが重視されていることがわかる。このことも今回構想した地域学習と繋がる場所である。

内容については、児童会活動の指導計画で「地域の実態に即した委員会を組織することも大切なことである。」<sup>(68)</sup>とされている。そしてクラブ活動では、「クラブ活動を通して地域の行事へ参加したり、地域の課題解決に向けて取り組んだりするなど活動の幅を広げて展開すること」<sup>(69)</sup>とされている。これらの場合、今回構想した授業であればどちらも「一穂プロジェクト」に関連した委員会を組織したり、行事へ参加したり、課題解決に取り組むことが考えられる。さらに学校行事の文化的行事では、「地域を理解



し、郷土への愛着を深める観点から、地域の伝統や文化に触れる機会を積極的に設定するよう配慮する<sup>(70)</sup>。」とされている。この場合は、「鶏冠井題目踊」に関わる学校行事を実施することが考えられる。遠足・集団宿泊の行事では、「地域社会の教育施設等を積極的に活用する<sup>(71)</sup>」とされている。この場合は、西国街道を歩いて街道沿いの施設に立ち寄ることが考えられる。勤労生産・奉仕の行事では、「地域社会の清掃活動、公共施設等の清掃活動、福祉施設との交流活動などが考えられる<sup>(72)</sup>。」とされている。この場合は、社会科の地域学習での経験を活かして、子どもが清掃場所として相応しい場所を検討するという活動も考えられる。

## V. 成果と課題

### 1. 成果

まず、実在する小学校での授業を想定し、実際に社会科の地域学習の授業づくり(構想)をして、その内容をできるだけ具体的に記すことができた。そして、複数の単元の授業づくり(構想)を記すことで、授業や単元の繋がりを視野に入れながら授業づくり(構想)をすることの具体例を示すことができた。

次に、地域という魅力的な教材の魅力を授業者が十分に引き出せていない理由として、子どもにとって身近な地域が見慣れた場所であるために、特に新鮮さや感動がない場所になっていることを明らかにした。つまり、意義を表面的に見ているだけでは授業づくりができないことを明らかにした。やはり、子どもの姿を見る必要がある。そして、子どもにとって身近な地域を新鮮で感動がある場所にするために、まずは授業者が好奇心を持って地域のことを調べるために矛盾を感じたり、違和感を覚えたりすること、そしてそのためには、「見ようとする」と、つまり物理的に何かを見て、現実を理解して既知のこと(数少ない単純な理論)と比較することが重要であることが明らかになった。さらに理解して比較をする時には自分自身

が使い慣れた言葉を使う方が実感を伴い、自分ごととして具体的事象を捉えることができることの重要性やこれらの行為をするための動機付けが感情に繋がり、繰り返しやることや長い時間をかけてやることが「好き」や「親しみ」といった感情を持つことができる可能性を高めることを示した。次に、子どもが「見ようとする」ことができるようになるための授業者の授業における仕掛けである、発問について述べた。その中で、発問によって閃き(暗示)と論理の相互作用を生み出すこととそのための準備の必要性を示した。さらに、発問に対する子どもの閃き(暗示)を適切に扱えるようになるために、授業の方向性のある程度明確にしておくこと、教材に関係することを中心とした幅広い知識と経験則が必要であることが明らかとなった。また、地理的、歴史的に有名なこととの繋がりを活用することも示した。そして、多くの時間を必要とする地域学習の準備のためにカリキュラム・マネジメントを活用して、十分な時間を確保することの必要性、さらにカリキュラム・マネジメント記されている教具については、「2万5千分1地形図」と「地理院地図 Vector」を活用することの有効性を示した。また、「まちたんけん」などのフィールドワークの重要性も示した。

そして、カリキュラム・マネジメントにも記されている「教科等横断的な視点」から道徳科や総合的な学習の時間、特別活動で地域学習の授業づくりや実践したことが有効に活用できることやその具体策について示した。その中で、実感を伴って理解することや矛盾を感じることを、自分自身の言葉を通じて考え、使い慣れた言葉を増やしていくこと、複雑さから学ぶこと、実際にやってみることなどが今回構想した地域学習との共通点であることが明らかになった。

## 2. 課 題

前提として、本稿を執筆する大きな目的は授業づくりをしている時に筆者自身が何を考えているのかを明らかにすることであった。筆者は小学校で授業実践をしている時から教育書や指導書を見て授業をつくるのが苦

手であった。今回もいくつかの教育書を読んだが結果は同じであった。そして、本稿を執筆してわかったことは、教育書や指導書に書かれていることは第3章の第1節に記した通り、他者が見つけたものだったということである。他者が見つけたものを使って授業を実践する場合、なぜ他者がこのような単元構成や授業展開にしたのか、なぜこの発問をこの場面で使ったのかなどを全て自分自身が納得いくまで読み解き、さらに実際に授業をする子どもに合わせる必要がある。もちろん、表面的な授業をすればいいと考えるのなら他者が見つけた方法を深く考えずに使って授業をすることはできるかもしれない。しかし、そうでなければ授業者自身が納得し、授業をする子どもに合わせるという工程は最低限必要だと考えられる。つまり、こういった労力を考えれば最初から自分自身が納得し、授業をする子どもに合わせた単元構成や授業展開、発問を考えた方がいいと思っていたのだろう。しかし、今回読んだ教育書の帯には、「おかげさまで累計100万部突破!」「学校教育書売り上げNo.1」といったことが書かれていた。つまり、それだけ多くの授業者が利用していると考えられる。もちろん、経験をあまりしていない授業者が授業づくりの参考にするために利用することは理解できるが、ある程度経験がある授業者も利用しているのであろうか。ここで考えられるのが、学習指導要領の改訂である。改訂によって学習内容が変わった時に参考にするのであろうか。いずれにしても、前述の通り他者が見つけたものを使うのであれば、なぜ他者がこのような単元構成や授業展開にしたのか、なぜこの発問をこの場面で使ったのかなどを全て自分自身が納得いくまで読み解き、さらに実際に授業をする子どもに合わせる必要がある。やはり、こちらの方が手間が掛かるのではないだろうか。次に考えられるのが、授業に再現可能性があると思われるということである。第3章の第2節に記した通り、授業に再現可能性はない。ただし、同じような授業でいいと考えるのなら、他者が見つけたものを深く考えずに使って授業をしてもいいのかもしれない。そして、再現可能性といえば授業に関する理論も多くある。近年、「理論と実践の往還」という

言葉がよく聞かれるが、どういう意味なのであろうか。第3章の第2節で引用した通り、「授業は非常に多くの要因が複雑に絡み合って成立しているが、理論はそのいくつかの部分・側面しか把握し客観化しない。」のである。つまり、理論を授業実践に取り入れるにはその理論が授業のどの部分に当てはまるのかを考え、実際に当てはめた時に他の部分との整合性も考えないといけない。さらに大前提として、他者がどのような方法でなぜこの理論を構築したのかなどを全て自分自身が納得いくまで読み解き、さらに実際に授業をする子どもに合わせる必要がある。もちろん、学問とは対象を分析することなので、対象を単純な要素に分解して抽象化し、そのことによってこれまで結び付かなかったことが結びついて新たな発見があるのである。そして、こうした新たな発見をいくつも積み重ねて理論が構築されていくのである。こういった行為は尊いもので人類がこれまで辿り着けなかったところへ辿り着く可能性を高めるという意味では当然必要なものである。しかし、宮崎(2013)が「科学の知は実践者にとってみれば自分の実践を見直し、あらたな発想を得るために利用可能な様々な資源の一つにすぎない。それは『科学』であることによって無条件に特別な位置を占めるものではないことが強調されなければならない。」<sup>(74)</sup>としているように、理論が実践に直接役立つということはないのである。このことを研究者も実践者も肝に銘じておく必要がある。特に実践者は、「このように実践の中で知を作り出す実践者の力こそ、新しい実践を創造的に作り出す実践者の力である。〈原理-応用〉図式は実践者からこの力を剥奪してしまう。」<sup>(75)</sup>こともわかっておかなければならない。だからといって理論を軽んじるのではなく、実践者は理論の要素を取り込んで実践に活かすことができる力を身につける必要がある。例えるなら、人間が食物を食べて消化をし、必要な栄養素を身体に取り込んで様々な細胞をつくり、様々な活動をしていくことに似ている。さらに、不必要だと判断したものを切り捨てる(排泄する)ことも必要になる。

こういった前提をもとに本稿の課題を上げていく。まずは、今回は授業

や単元の繋がりを意識した授業づくりを示すために、いくつかの単元を構想するという手法を取った。しかし、そのために1時間の授業の内容については大まかなものとなってしまった。やはり授業づくりでは単元の構想も大切であるが、1時間の授業をつくるためにどのようなことを考え、さらに実践中にどのようなことを考えているのかが重要となる。そのため、今後は1時間の授業を対象として授業づくりの考察をする必要があると考えられる。次に、単元計画や授業展開、発問などの他者の実践や理論をいかに取り入れていくかを考察することである。先程は人間の身体に例えて他者の実践や理論の要素を取り込んでいくと説明したが、それは具体的にはどのようなことなのかを明らかにする必要がある。そして、経験則を感覚にすると記したが経験則がどのようにして感覚になるのか、その過程を明らかにする必要がある。本稿では経験則を積み上げると記したが佐伯(2013)は、「何が「要素となるかは、後の活動が前の経験を編み直す中で決まるのであって、部品を組み立てるようにして後の活動が積み上がって「構成」されるわけではない。」<sup>(76)</sup>としている。このことについても1時間の授業を丁寧に観察しながら考察していく必要があると考えられる。

#### 注・引用文献

- (1) 文部科学省(2017)『小学校学習指導要領解説社会編』日本文教出版、p. 29.
- (2) 文部科学省(2017)『中学校学習指導要領解説社会編』東洋館出版社、p. 51.
- (3) 朝倉隆太郎(1989)『地域に学ぶ社会科教育』東洋館出版、pp.10-12.
- (4) ①地域の事象は、子どもたちの日常生活と深く結びついているために、生活上の欲求や必要性に裏付けられた、効果的な学習の素材となり、より広範な社会生活の学習についての意欲と関心を高めるきっかけを作り出すことができる。  
②具体的な社会事象を、直接的な観察や体験・調査や見学を通して、子ども自らの目や耳で確かめながら学習することができるので、自分でしっかりと事実を見きわめ、自分の頭の中でその意味や原因を深く追求していく論理的な思考能力や、資料の収集とその効果的活用のための技能を育成する最適

の場となることによって、のちの社会科学習を支える基礎的な学習方法の獲得が可能となる。したがって社会科における地域学習は、理科における実験やその他の教科における実習に類する教育的効果を期待することができる。

③単に地域についての個別的で、網羅的な知識の習得だけに終わるのではなく、社会全体の仕組みの本質に迫っていくことのできる、客観的、普遍的な見方・考え方の基礎を形成する糸口となる。つまり、比較的仕組みが単純で簡潔な地域の学習を通して習得された、社会生活についての全体的構造は、これから獲得されるであろう社会についての多様な知識を、的確に位置づけ総合化するための枠組みとして作用することができる。すなわち地域社会の学習を通して、われわれの社会生活の中に見られる生産活動や政治的、社会的、文化的活動の、より普遍的な原則を科学的に発見させることができるばかりでなく、一つのまとまりのある社会集団の中で、それぞれの制度や組織が互いに他とどのように関連し結びつきながら一つの全体的な統一を形成しているかといった全体的視野を提示することによって、子どもたちの将来の生活を支える基盤的知識とすることができる。

④地域社会の中で、子ども時代の生活環境は、一生を通じて忘れることのできない心のふるさとであり、精神生活の基盤である。子どもたちの慣れ親しんだ地域事象の学習を媒介として、人間と社会生活との本来の関係を問い直し、両者を冷たくさめたものとしてではなく、日々の生活に直接大きな影響を与える熱い関係として捉えることによって、社会生活に積極的にかかわり参加しようとする自主的な態度を形成することができる。

⑤このような意味で、子どもたちにとって地域社会とは、様々な自然や人間や社会と出会い、自分を取り巻く環境についての認識を深めながら、共同体の構成員としての自覚を高めていくための最も身近な生活空間であり、これなくしては自らの人間的な成長と発達も成り立たない、日々の生活の基盤となる場所であるということができる。

今谷順重（2007）「中学年：地域社会の学習指導案について」『優れた社会科授業の基盤研究Ⅰ小学校の“優れた社会科授業”の条件』明治図書出版、pp.13-14.

- (5) 伊藤貴啓（2017）「愛知県三河地方における小学校社会科副読本の利用状況からみた社会科地域学習の課題」『地理学報告』第119号、p.84.
- (6) 宮崎正勝（1994）「初等社会科における地域学習の意義と方法—話し合い、イメージ・マップ作り、物語作りを中心に—」、『教育方法学研究』第20巻、p.119.
- (7) 池俊介（2012）「地理教育における地域調査の現状と課題」、『E-journal GEO』Vol.7(1)、p.40.
- (8) 小田由梨花・河本大地（2022）「兵庫県神戸・阪神地域における小学校社

## 社会科における地域学習の授業づくりについての考察

会科地域学習副読本の構成」『次世代教員養成センター研究紀要』8巻, 英治出版, p.122.

- (9) 友居秀行 (2022) 「尼崎市における地域学習のあり方の研究—地域学習の授業実態と教師の意識調査を通して—」『兵庫教育大学地理学・地理教育研究室報告書』第27号, p.11.
- (10) 今井貴秀・他15名 (2017) 「広島県広島市旧西条町内に分布する石碑の特徴と社会科教材としての意義」『広島大学総合博物館研究報告』9, pp.2-3.
- (11) 今谷, 前掲書(4), p.14.
- (12) 文部科学省, 前掲書(1), p.34.
- (13) 文部科学省, 前掲書(1), p.44.
- (14) 文部科学省, 前掲書(2), pp.51-52.
- (15) 文部科学省, 前掲書(1), pp.36-37.
- (16) 山岡光治 (2010) 『地図の科学』ソフトバンククリエイティブ, p.62.
- (17) 山岡, 前掲書(16), p.64.
- (18) 人々の生活の様相を地図上で, 的確に示しているものが土地利用である。土地利用は記号で地図に示されているため, その記号を覚えていなければ土地利用を地図上で知ることができない。土地利用の記号を覚えなければならないことが, 地図の読み取りを難しいものという, あるいは地図を読めないという誤解を生み出している。土地利用の記号は無理に覚える必要はなく, 必要ならば土地の凡例に載っているものを見ればよい。重要なことは, 地図と実際の風景で土地利用の存在を確認し, その土地利用から人々の生活の様相を読み解くことである。  
菊池俊夫・岩田修二 (2005) 『地図を学ぶ—地図の読み方・作り方・考え方—』二宮書店, pp.54-55.
- (19) <https://www.weblio.jp/content/神饌田> (2023年8月17日最終アクセス)
- (20) [https://www.city.muko.kyoto.jp/ikkrwebBrowse/material/files/group/33/muko\\_historical\\_calendar\\_all\\_2020080614542198.pdf](https://www.city.muko.kyoto.jp/ikkrwebBrowse/material/files/group/33/muko_historical_calendar_all_2020080614542198.pdf) (2023年8月17日最終アクセス)
- (21) <https://fushimiinari-guide.com/shinden/> (2023年8月17日最終アクセス)
- (22) <https://www.asahi.com/articles/ASP6B76BCP69PLZB017.html> (2023年8月17日最終アクセス)
- (23) 高久嶺之介 (2002) 『図録20世紀のむこうまち』向日市文化資料館, p.51.
- (24) 二枚田 にまだ [向日市寺戸町]

北隣の小字「渋川」との境を今は暗渠になったが(「渋川」参照), 石田川が流れている。古くは, 二枚田川とっていた。この地では, 一区画の水田に高低があり, その段落部分にあぜを作ったので, 田が二枚に見え, この地名が生まれたと伝わる。水田が傾斜していたので, 段落をつけて水もちをよ

くしたのであろうといわれる(京都新聞「乙訓地名物語・一二〇」一九八二年七月三日付)。

吉田金彦・糸井通浩・網本逸雄(2014)『京都地名語源辞典』東京堂出版, p.441.

- (25) 伏見稲荷大社御鎮座千三百年史調査執筆委員会(2011)『伏見稲荷大社御鎮座千三百年史』伏見稲荷大社, p.290.
  - (26) 伏見稲荷大社, 前掲書(25), p.290.
  - (27) <https://maps.gsi.go.jp/vector/#15/34.957195/135.705206/&ls=vstd&disp=1&d=1> (2023年8月17日最終アクセス)
  - (28) 京都市小学校社会科教育研究会(2022)『令和4年度版わたしたちの京都3年』京学ラボ, pp.52-53.
  - (29) 文部科学省, 前掲書(1), pp.34-38.
  - (30) 文部科学省, 前掲書(1), p.34.
  - (31) <https://www.city.muko.kyoto.jp/kurashi/shisei/shisaku/7/2/1449541553057.html> (2023年8月17日最終アクセス)
  - (32) 高久, 前掲書(23), p.69.
  - (33) 文部科学省, 前掲書(1), p.62.
  - (34) 「この井戸は約1.5メートルの深さまで掘られています。地層を見れば1メートルほどでも水が出たと推測できます。少なくとも江戸時代までは、このあたりの地下水位はきわめて高かったのです。これまでさまざまな遺跡を発掘してきましたが、京都の井戸はどれも非常に浅いのが特徴です。平安京の中であれば、おおよそ2メートルも掘れば、たいいていところで水が出たと思われま。そういう意味で、京都は水を得るには非常に楽な土地だったんですね」
- NHK「アジア古都物語」プロジェクト(2002)『京都千年の水脈』日本放送出版協会, p.23.
- (35) 現在の向日市の水源は地下水と表流水の2種類である。地下水を水道水として処理している物集女西浄水場(深井戸10本)の一日の施設能力が21,000m<sup>3</sup>で、表流水を水道水として処理している乙訓浄水場の一日の協定基本水量は12,700m<sup>3</sup>である。
- 向日市上下水道部(2022)『令和4年度水質検査計画』より [https://www.city.muko.kyoto.jp/ikkrwebBrowse/material/files/group/30/R4suisitukensa/keikaku\\_2022050616121935.pdf](https://www.city.muko.kyoto.jp/ikkrwebBrowse/material/files/group/30/R4suisitukensa/keikaku_2022050616121935.pdf) (2023年8月17日最終アクセス)- (36) 高久, 前掲書(23), p.36.
- (37) <https://1po-project.com> (2023年8月17日最終アクセス)
- (38) Ian Leslie(2014)『CURIOUS: The DESIRE to Know & Why Your FUTURE Depends on it』E-Books ,Quercus, p.32.



- (39) 朝倉, 前掲書(3), p.10.
- (40) Leslie, 前掲書(38), p.32.
- (41) 朝倉, 前掲書(3), p.11.
- (42) 1963年11月22日, ダラスでアメリカ合衆国大統領, ジョン・F・ケネディが暗殺された事件について, 「あの事件を知らされたとき, 事件の当事者でもなく直接の目撃者でもない不特定多数の「われわれ」は何をしていたのか。みんなが驚き, 動揺し, 興奮していた。こうしたことを記憶として語り合うことによって, 歴史家のものではない「われわれにとっての」ケネディ暗殺事件の姿が浮かび上がり, それを結晶化することによって, 自分たちにとって生々しい歴史を作り出すことができる。こうした生々しい歴史を背景としたときにはじめて1963年11月22日のダラスでの出来事が歴史的な大事件としてのリアリティーをもってわれわれの前に現れてくるのだ。」と, 自分たちの言葉で語ることの重要性が述べられている。
- 佐伯胖・佐々木正人(2013)『新装版アクティブ・マインド』東京大学出版会, pp.167-168.
- (43) 矛盾を感じたり, 違和感を覚えたりすることは問題意識(問い)を持つことに繋がるが, LeslieはSilverのインタビューを引用して, 「最も困難を伴うのが, 重要な問いを生み出すための直観を教えることである。」としている。つまり, 矛盾を感じたり, 違和感を覚えたりすることを教えることは, 簡単なことではないのである。
- Leslie, 前掲書(38), pp.152-153.
- (44) 吉本均(2006)『学級の教育力を生かす吉本均著作選集3 学習集団の指導技術』明治図書, p.48.
- (45) 森分孝治(1984)『現代社会科授業理論』明治図書, p.33.
- (46) この場合の知識には, 他者の授業実践や一般的な(他者が見つけた)授業理論なども含まれる。
- (47) 文部科学省(2017)『小学校学習指導要領解説総則編』東洋館出版, p.39.
- (48) 文部科学省, 前掲書(47), p.42.
- (49) 文部科学省, 前掲書(47), p.42.
- (50) 文部科学省, 前掲書(47), p.77.
- (51) 文部科学省, 前掲書(47), p.41.
- (52) 文部科学省(2017)『小学校学習指導要領解説特別の教科道徳編』廣済堂あかつき出版, p.10.
- (53) 文部科学省, 前掲書(52), p.18.
- (54) 文部科学省, 前掲書(52), p.19.
- (55) 文部科学省(2017)『小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編』東洋館出版, p.7.

- (56) 文部科学省, 前掲書(55), p.9.
- (57) 文部科学省, 前掲書(55), p.10.
- (58) 文部科学省, 前掲書(55), p.13.
- (59) 文部科学省, 前掲書(55), p.15.
- (60) 文部科学省, 前掲書(55), p.16.
- (61) 文部科学省, 前掲書(55), pp.60-61.
- (62) 文部科学省, 前掲書(55), p.29.
- (63) 文部科学省 (2017) 『小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編』 東洋館出版, p.12.
- (64) 文部科学省, 前掲書(63), p.23.
- (65) 文部科学省, 前掲書(63), p.13.
- (66) 文部科学省, 前掲書(63), p.15.
- (67) 文部科学省, 前掲書(63), p.119.
- (68) 文部科学省, 前掲書(63), p.91.
- (69) 文部科学省, 前掲書(63), p.110.
- (70) 文部科学省, 前掲書(63), p.122.
- (71) 文部科学省, 前掲書(63), p.125.
- (72) 文部科学省, 前掲書(63), p.127.
- (73) 「科学は常に部分を捉えているだけで、「現実の全体性を捉えていない」」  
佐伯胖・宮崎清孝・佐藤学・石黒広昭 (2013) 『小学校学習指導要領解説  
総合的な学習の時間編』 東京大学出版会, p.148.
- (74) 佐伯・宮崎・佐藤・石黒, 前掲書(73), p.86.
- (75) 佐伯・宮崎・佐藤・石黒, 前掲書(73), pp.79-80.
- (76) 佐伯・宮崎・佐藤・石黒, 前掲書(73), p.192.

## 参考文献

- ・朝倉隆太郎 (1989) 『地域に学ぶ社会科教育』 東洋館出版
- ・今谷順重 (2007) 「中学年：地域社会の学習指導案について」 『優れた社会科授業の基盤研究 I 小学校の“優れた社会科授業”の条件』 明治図書出版
- ・山岡光治 (2010) 『地図の科学』 ソフトバンククリエイティブ
- ・菊池俊夫・岩田修二 (2005) 『地図を学ぶ—地図の読み方・作り方・考え方—』 二宮書店
- ・向日市史編さん委員会 (1985) 『向日市史下巻』 京都府向日市
- ・向日市史編さん委員会 (1988) 『向日市史資料編』 京都府向日市
- ・水谷千秋 (2009) 『謎の渡来人秦氏』 文春新書
- ・大和岩雄 『統秦氏の研究』 大和書房
- ・千石雅仁 (2016) 『昭和天皇実録第五』 東京書籍

## 社会科における地域学習の授業づくりについての考察

- ・野間佐和子（1989）『昭和二万日の全記録第1巻昭和への期待昭和元年▷3年』講談社
- ・村上ともか（1992）『籠—RON—③』小学館
- ・高久嶺之介（2002）『図録20世紀のむこうまち』向日市文化資料館
- ・吉田金彦・糸井通浩・網本逸雄（2014）『京都地名語源辞典』東京堂出版
- ・伏見稲荷大社御鎮座千三百年史調査執筆委員会（2011）『伏見稲荷大社御鎮座千三百年史』伏見稲荷大社
- ・柳父章（1982）『翻訳後成立事情』岩波新書
- ・京都市小学校社会科教育研究会（2022）『令和4年度版わたしたちの京都3年』京学ラボ
- ・向日市文化資料館（2013）『むこうし・おとくにの絵図・地図・写真—うつつりかわる景観』向日市教育委員会
- ・老川慶喜（2014）『日本鉄道史 幕末・明治篇』中公新書
- ・老川慶喜（2016）『日本鉄道史 大正・昭和戦前篇』中公新書
- ・今尾恵介（2017）『地図と鉄道省文書で読む私鉄の歩み 関西（1）阪神・阪急・京阪』白水社
- ・吉川民二（1940）『乙訓郡史』臨川書店
- ・菊池博（2002）『目で見る向日・長岡京・大山崎の100年』郷土出版社
- ・長谷川澄夫（2012）『保存版長岡京・向日・大山崎の今昔』郷土出版社
- ・向日市文化資料館（2015）『乙訓の西国街道と向日町』向日市文化資料館
- ・向日市文化資料館（2019）『向日市の歴史』向日市文化資料館
- ・NHK「アジア古都物語」プロジェクト（2002）『京都千年の水脈』日本放送出版協会
- ・西山秀人（2007）『ビギナーズ・クラシック日本の古典 土佐日記(全)』角川ソフィア文庫
- ・藤井寛清（1990）『劇画・日像上人』日蓮宗新聞社
- ・中井均・仁木宏（2005）『京都乙訓・西岡の戦国時代と物集女城』文理閣
- ・中西昌史・正垣雅子（2014）『ふるさと歴史紙芝居 第貳巻 京都向日市の戦国時代2 太閤唐入り』中西昌史
- ・中西昌史・正垣雅子（2011）『ふるさと歴史紙芝居 向日市の戦国時代 西岡衆の活躍』中西昌史
- ・中西仁・小林隆（2018）『初等社会科教育』ミネルヴァ書房
- ・澤井陽介・石井正広（2020）『板書で見る全単元・全授業のすべて 小学校3年』東洋館出版
- ・澤井陽介・石井正広（2020）『板書で見る全単元・全授業のすべて 小学校4年』東洋館出版
- ・木村博一・新谷和幸（2021）『板書&写真でよくわかる 365日の全授業 小学

校社会 3 年』明治図書

- 木村博一・新谷和幸（2021）『板書&写真でよくわかる 365日の全授業 小学  
校社会 4 年』明治図書

# **Considerations for lesson creation focusing on regional studies in social studies: Including cross-curricular perspectives such as moral education, integrated learning time, and special activities**

IKEDA, Yasuhiro

## **Abstract**

This paper discusses how to create lessons that fully draw out the appeal of a region as a teaching material, based on the actual (conceptual) creation of lessons for regional studies in elementary school social studies. Furthermore, this paper will present concrete practices for developing teaching materials from a “cross-curricular perspectives,” as described in Curriculum Management, using the region as a teaching material that makes ample use of local standout qualities.

As a result, it became clear that it is not possible to create a class simply by first taking a superficial view of significance. It also became clear that it is important for the classroom teacher to be curious to investigate the region, feel contradictions and discomfort, and then recognize reality and compare it with what is known (a few simple theories). Further, it was shown that when recognizing and making comparisons, use of words that one is familiar to accompany the actual feeling is preferable. Next, it was shown that questions create an interaction between inspiration (suggestion) and logic, and that preparation is necessary for this interaction. It further became clear that in order to be able to appropriately handle the children’s inspiration (suggestions) in response to questions, it is necessary to have some clarity regarding the direction of the class and a wide range of knowledge and rules of thumb, mainly related to the teaching materials. The necessity of using curriculum management techniques to ensure sufficient time for the preparation of

time-consuming regional studies, and the effectiveness of using 1:25,000 scale topographic maps and Geographical Survey Institute maps Vector for the teaching tools described in Curriculum Management are also shown.

This paper also presents effective use cases for the lessons and practices of community studies in moral education, integrated learning time, and special activities, as well as concrete measures for their implementation. It became clear that understanding with a sense of reality, feeling contradictions, thinking through one's own language, increasing one's familiar vocabulary, learning from complexity, and actual experimentation are common points with the regional studies envisioned in this project.